

近世期の茶の湯における定家様享受

―『大正名器鑑』の箱書調査を基点として―

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 福原 真子

要 旨

『大正名器鑑』は、実業家で茶人・箒庵としても知られた高橋義雄により、大正期に編集された茶道具名物記である。大正一〇（一九二一）年から昭和元（一九二六）年にかけて九編一冊が刊行され、昭和二（一九二七）年に索引を加え完結した。由緒ある茶道具を列記し、名称・所蔵者・寸法・付属物・由来等が記される。収録された茶道具は茶入四三六点、茶碗四三九点、計八七五点にのぼる。写真によって示された初の茶道具名物記であると共に、現在に至るまで内容の充実度においてこれを超えるものはないとされる。

本稿では、『大正名器鑑』の掲載写真を用いて、箱書に記された文字の字形について調査を行う。本書における箱書を網羅し俯瞰的に捉えることで、これまで漠然と論じられていた箱書の字形について、体系的な実証が可能であると考ええる。なかでも本書で散見される定家様の箱書に焦点をあてることで、近世期の茶の湯における定家様享受の様相について明らかにすることを本研究の目的とする。

調査では、各茶器の箱書に記された文字の字形を「篆隸体」「楷書体」「行草体」の書体に「定家様」を加えて分類した。これに、書付者・書付箇所・書付方法を併記した。尚、調査結果は一覧として表を作成し、本稿末尾に付す。

この調査結果をもとに、以下二点の考察へと及ぶ。先ず一点は、本書で定家様の書付者として散見される小堀遠州についてである。茶の湯における定家様享受の様相を捉えるにあたり、遠州は極めて重要な人物と考えられる。そこで、遠州の定家様使用に至る過程を再度確認し纏めた後、近世期の武家における遠州遺墨の享受について、土佐藩での資料を一例として検証する。

二点目としては、本書で頻繁に見られる定家様に関連する字形の書き分けについてである。定家様と対になって用いられることが多い篆隸体に着目し、書き分けの傾向を明らかにする。さらに、後の大名茶人である松平不昧・酒井宗雅・溝口直諒による定家様と篆隸体の享受について検証する。以上の調査結果とこれに伴う検証から、近世期に見られる定家様享受の様相は、定家様と篆隸体を共に様式美として捉えた遠州とそのコミュニティを起点として、遠州に共感した茶人たちによる継承と展開が大きく関与した事象であると捉えられる。

キーワード：定家様 大正名器鑑 小堀遠州 藤原定家 箱書 歌銘 書道 茶道 松平不昧 篆隸体

Appreciation of the Teika-style in Tea Ceremony of the Edo Period Based on an Investigation of Box Inscriptions on *Taishomeikikan*

FUKUHARA Masako

Department of Japanese Literature,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

Taisho-Meikikan is a book of tea ceremony utensil masterpieces compiled by Yoshio TAKAHASHI, a businessman and tea master. The book was published in 11 volumes consisting of 9 chapters between 1921 and 1926, and was completed with an index in 1927. The venerable tea utensils are listed, and their names, owners, dimensions, accessories, history, and other information are noted. The collection contains 436 tea caddies and 439 tea bowls, totaling 875 items. This is the first book on tea ceremony utensils with photographs, and it is said that no other book to date has surpassed it in terms of richness of content.

This report examines the calligraphical types written on the boxes using photographs from the *Taisho-Meikikan*. By taking a higher perspective view of the box calligraphy, the author believes that it is possible to systematically demonstrate the character forms of box calligraphy, which have not been extensively discussed until now. The purpose of this study is to clarify the aspect of appreciation of the Teika-style in the tea ceremony of the early modern period by focusing on the Teika-style box calligraphy found in this book.

The study categorized the forms of the characters inscribed on the boxes into *Tenrei*, *Kaisyo*, and *Gyousou* styles of writing, plus Teika-style. In addition, the author listed the names of the calligrapher, the positioning of the calligraphy, and the writing style. The results of the survey are shown in the table at the end of this report.

Based on the results of the research, the author discusses the following two points. The first is about Enshu KOBORI, who appears frequently in this book as a calligrapher of the Teika-style. Enshu is considered to be an extremely important figure in terms of appreciation of the Teika-style in tea ceremony. After reconfirming and summarizing the process that led to Enshu's use of the Teika-style, appreciation of Enshu's calligraphy by *samurai* in the early modern period is examined, using materials from the Tosa domain as an example.

The second point concerns the distinguishing character forms related to the Teika-style, which is frequently found in this book. The author focuses on the *Tenrei*-style, which is often used in combination with the Teika-style, and clarifies tendencies in the writing style. Further research is conducted on appreciation of the Teika-style and the *Tenrei*-style by tea masters such as Fumai MATSUDAIRA, Souga SAKAI, and Naoaki MIZOGUCHI.

Based on the above findings and verification, the aspect of appreciation of the Teika style in the early modern period is traced back to Enshu and his community, which considered both the Teika-style and the *Tenrei*-style as stylistic beauty. Also, appreciation of Teika-style is largely due to the succession and development by tea masters who identified with Enshu.

Key words: Teika-style, *Taisho-Meikikan*, Enshu KOBORI, Teika FUJIWARA, Hakogaki, Utamei, Calligraphy, Tea Ceremony, Fumai MATSUDAIRA, *Tenrei*-style

はじめに

- 一 箱書と銘
 - 二 調査方法
 - 三 定家様と小堀遠州
 - 三 一 調査結果と考察
 - 三 二 小堀遠州の定家様使用に至る背景
 - 三 三 近世期の武家における遠州筆跡の享受
 - 四 定家様と篆隸体
 - 四 一 調査結果と考察
 - 四 二 近世後期の大名茶人たちによる定家様と篆隸体の享受
- おわりに

はじめに

茶道具を収納する箱には、「箱書」と称される文字の書き付けが見られる。箱書には、藤原定家由来の印象的な字形「定家様」⁽¹⁾が散見される。この定家様の箱書に焦点をあてることで、近世期の茶の湯における定家様享受の様相について明らかにすることを本研究の目的とする。茶道具の箱書は総体を把握することが困難であることから、茶道具名物記『大正名器鑑』を一定の枠組みとして捉え、本稿の基点とする。

『大正名器鑑』は、実業家で茶人・箒庵としても知られた高橋義雄（一八六一—一九三七）により、大正期に編集された茶道具名物記である。大正一〇（一九二一）年から昭和元（一九二六）年にかけて九編一一冊が刊行され、昭和二（一九二七）年に索引を加え完結した。第一編から第五編は「茶入之部」、第六編から第九編は「茶碗之部」で構成される。由緒ある茶道具を列記し、名称・所蔵者・寸法・付属物・由来等が記さ

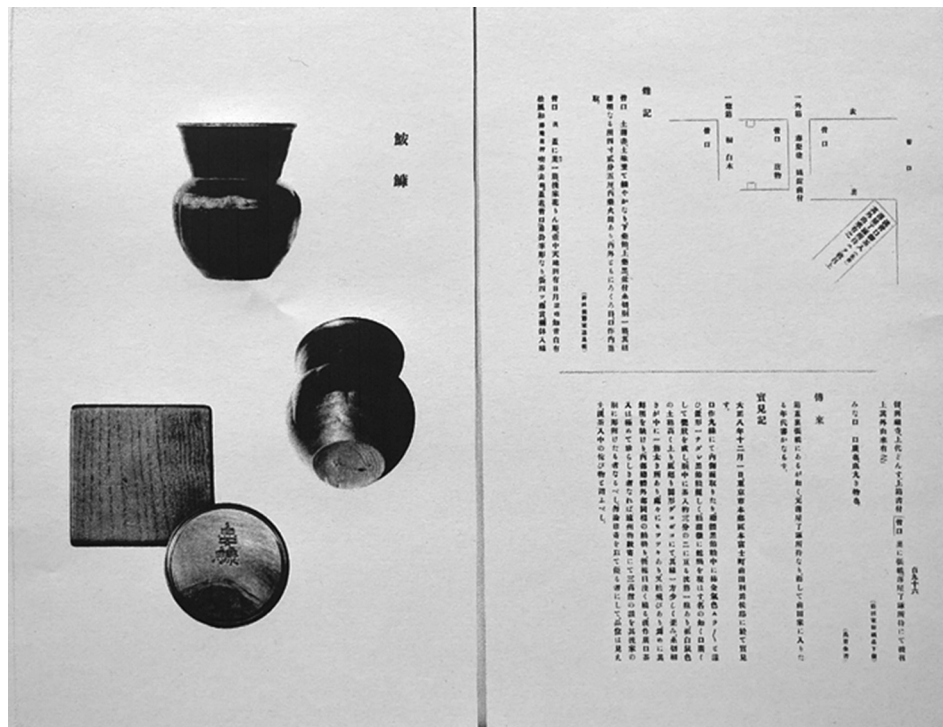
れる。収録された茶道具は茶入四三六点、茶碗四三九点、計八七五点のぼる。

林屋晴三「大正名器鑑 補説」によれば、箒庵における最も重要な関心は、古今の名器を写真図版によって網羅的に収録することにあつた⁽²⁾。写真によって示された初の茶道具名物記であると共に、現在に至るまで内容の充実度においてこれを超えるものはないとされる。写真は附属物にまで及び、箱も多く掲載される。その箱には、品物の銘などが箱書として記されている【図一】。

近世期に編纂された松平不昧編『古今名物類聚』、本屋了芸『麟鳳亀龍』、『三冊名物記』等の茶道具名物記にも、箱書の忠実な模写が見られる。箱書そのものの強い関心からであろう。これらの流れを引き継いでいる『大正名器鑑』は、模写に替わって近代に普及した技術である写真を使用した。殆どの品物には箱書の写真が付随しており、名物と言われる茶道具の箱書を最も多く一覧できる資料であると言える。そこで本稿では、掲載された箱書の写真を用いて、記された文字の字形について調査を行うこととした。

『大正名器鑑』における箱書に関しては、名児耶明氏⁽³⁾、藤原みずき氏⁽⁴⁾によつて、茶入における小堀遠州の箱書に注目した先行研究がある。本稿では先行研究に加え、収録された全ての茶道具と書付者を調査対象とする。『大正名器鑑』における箱書を網羅し俯瞰的に捉えることで、近世期での茶の湯における箱書の全体像を把握すると共に、遠州による箱書の特徴をより鮮明にすることが可能である。そして、これまで漠然と論じられていた箱書の字形について、体系的に実証できると考える。

尚、『大正名器鑑』に掲載される有名茶人の筆跡については、本来は伝称筆者のものとして捉えるべきである⁽⁵⁾。しかし、近世期の茶の湯文化において、遠州をはじめとした本書に掲載された人物によると信じ



【図1】『大正名器鑑』での写真図版

られてきた定家様の筆跡は、その享受を探っていく上で有用であると考
え論考を進めることとする。

次に、本書での調査結果をもとに、以下二点の考察へと及びたい。先
ず一点は、本書において、定家様をもつて多くの箱書を付した小堀遠州
についてである。茶の湯における定家様享受の様相を捉えるにあたり、
遠州は極めて重要な人物と考えられる。そこで、遠州の定家様使用に至
る過程を再度確認し纏めた後、近世期の武家における遠州遺墨の享受に
ついて、土佐藩での資料を一例として検証する。二点目としては、本書
で頻繁に見られる定家様に関連する字形の書き分けについてである。定
家様と対になって用いられることが多い篆隸体に着目し、両字形の書き
分けの傾向を明らかにする。さらに、後の大名茶人である松平不味・酒
井宗雅・溝口直諒による定家様と篆隸体の享受について検証する。

以上の調査結果とこれに伴う検証から、近世期の茶の湯における定家
様享受について考えてみたい。

一 箱書と銘

先ず本論に入る前に、茶の湯における「箱」「箱書」「銘」について
触れることとする。

茶道具を収納する「箱」は、茶の湯の流行と共に室町末期に登場し、
器物ごとに特徴のある箱が作られるようになった⁽⁶⁾。茶の湯において
は単に容器としてだけでなく、鑑賞の対象とされてきた。名物と言われ
る茶器には、内箱・中箱・外箱・総箱と幾重にも「箱」は重ねられる。
茶入には、中身の形に準じた形の「挽家」と称される「箱」が用いられ
ることも多々ある。材質は桐・杉などの木材が用いられるが、紫檀・黒檀・
鉄刀木などの唐木を継ぎ合わせたものや、漆塗も多く見られる。なか
には蒔絵が施された漆塗や、象牙による挽家などもあり、装飾性が高いも
のが散見される。「茶道具における箱は内容物の保護以上に、内容を向

上させる大きな役割がある」⁽⁷⁾からである。

この「箱」の蓋や胴には、次のような事項が記される。「茶碗」「茶入」など品物の種類。「井戸」「瀬戸」など分類名。品物の「銘」と称される呼び名。作者名。伝来などの由緒。歌銘の和歌、詩銘の漢詩。署名、落款。鑑定による極め。蔵番号等の管理番号。これらは「箱書」と称され、その品物を作らせた人、茶器として採り上げた人、所持した人などによって書かれる。記載された文字は、墨による「墨書」の他に、金粉・銀粉を用いた「字形」、朱・黒漆を使った「漆書」、字の輪郭を彫った「額彫」、書付の紙を貼った「貼紙」がある。茶の湯における箱書は、鑑定というよりも、箱と同様に鑑賞に重点が置かれるという性質を持つ。

『大正名器鑑』に記載される名物と言われる茶入や茶碗には、総じて「銘」と称される呼び名が箱書として記されている。銘は、動植物の名、故実がある人物の名、名所などの地名、故事の名、和歌・漢詩にちなんだ名がつけられる。なかでも和歌による「歌銘」や漢詩による「詩銘」は、風流さを増すものとして茶の湯では捉えられ、本書においても頻繁に見られる。

このような性質を持つ箱書は、箱に入っている物の情報が単に記されているのではなく、そこには茶の湯の世界観が存在する。よって記された文字の字形には、書付者の美意識など何らかの表現が含まれていると考えられる。本稿では、この箱書の字形について調査する。

二 調査方法

『大正名器鑑』(大正名器鑑編纂所、一九二二—一九二七)全編を用いて、茶入・茶碗の箱書について調査し、一覧表に纏め本稿末尾に付す。具体的な調査方法や表の記載については、以下の通りである。

まず、「編」「部」「分類」「通称」は、『大正名器鑑 索引』に従った。そして「通称」で示された茶入・茶碗について、次の項目を調査した。

「書体」として、写真画像より箱書の書体を「篆隸体」「定家様」「楷書体」「行草体」に分類し、該当する書体に「○」を付した。本来、毛筆による書体は、篆書体、隸書体、草書体、行書体、楷書体の五つに分けられる。そのうち、篆書体と隸書体を「篆隸体」とした。両書体が混合されている箱書が往々にして見られ、古来より篆隸体と称される事例もあることから、本稿での表記もこれを用いた。行書体と草書体についても同様の理由から「行草体」とした。尚、「楷書体」と「行草体」の区分は、点画の連続や省略の有無を基準とした。以上のように通常の五書体を三書体として分類した。

さらに、本稿では茶の湯における定家様享受の実態解明を目的とするため、「定家様」については三書体とは別の一種として取り上げた。定家様は書体ではなく書風であり、書体としては行書体もしくは楷書体に区分される。しかし本稿では、定家様検証のため、特別に「書体」項目に加えた。

箱書画像が無いものについては「記載無」とした。また、楷書体であっても隸書体の筆法が僅かに窺えるものなど、異なる書体の特徴が含まれる事例も若干見られた。これについては特記事項にその旨を記した。

「書付文字」については、写真画像を基に調査し、箱書として記されている文字を忠実に示した。表記は画像に従い、記載文字のまとまりや改行に合わせてスペースを入れて記した。ただし、変体仮名については現行の平仮名に改めた。また、和歌や漢詩、由来など文字数が多い事例については「※」を付し、特記事項に概要を示した。箱書画像が無いものについては「—」とした。

「書付者」の表記は『大正名器鑑』の表記に従った。ただし漢字表記については、現行の漢字とした。また、同一人物であっても役職名や雅号等の異なる表記が多々あることから、通称名を()内に記して可能な限り統一した⁽⁸⁾。

「書付箇所」である箱は、先述の通り内箱・中箱・外箱・総箱・挽家と種類が豊富である。該当する箱名を『大正名器鑑』の画像と記載内容を照合して判断し、その表記に従って示した。通常は箱蓋の表に記載されることが多いことから、(一)での記載が無い場合は、箱蓋の表に記載されていることとする。また、箱蓋の裏にも記載される場合は「(裏)」と区別した。挽家については、蓋の他に胴に記載されることも多く、その場合は「(蓋)」(「胴)」と区別した。

「書付方法」は先述の通り「墨書」「字形」「漆書」「額彫」「貼紙」等がある。『大正名器鑑』の表記に従い、これを示した⁹⁾。ただし、全ての書付方法が本書には記載されているわけではなく、画像により墨書と判る箱書もあるが、あえて画像による判断は加えていない。

「特記事項」には、各項目に関する補足を記した。具体的には、次のような内容となる。書体や書付者、書付方法が複数ある際、該当する文字の明記。書付文字が和歌・漢詩・由来など文字数が多い際、書付内容の概要。書付者の判断に関する情報が記載されている際の補足。異なる書体の筆法が僅かに窺える際の補足。画像不明瞭につき、書付文字の判断が不可能である旨。画像と記載内容の照合からは、書付箇所の判断が不可能である旨。加えて、添掛物など箱以外の文字画像の掲載がある際は、書体と書付者も含めて記した。

以上を表にまとめ一覧とすることで、『大正名器鑑』における箱書全てを網羅し、茶入・茶碗の箱書に見られる字形の傾向を可視化する。なかでも本稿では、本書で散見される定家様の箱書と、その書付者として名が挙がる小堀遠州に焦点を当て考察を試みる。

三 定家様と小堀遠州

三・一 調査結果と考察

『大正名器鑑』に記載された茶道具の多くは「名物」と呼ばれる。名物には、足利義政を中心とする東山時代に名を得た「大名物」、利休時代に名を得た「名物」、小堀遠州によって選ばれた「中興名物」に分類される。この分類は、松平不昧の『古今名物類聚』が初見とされる。茶器については、大名物や名物が海外から渡ってきた唐物であるのに対し、中興名物は国内の窯で焼かれた和物が多い。

これらの箱書に用いられた書体を見ると、隸書体・楷書体については全体にわたる。この二書体は、文字の明瞭性や木材への書き易さから箱書として適していたと考えられる。しかし、漢字・仮名共に、大名物や名物のような唐物には行草体が用いられ、中興名物では定家様が用いられるという特徴も見られる。これについては書付者に起因する傾向がある。大名物や名物のような唐物は、利休やその子孫など利休由来の人物が中心であるが、中興名物は、遠州や遠州にまつわる人物による。特に『大正名器鑑』では、その多くは遠州によって記されている。

本書に見られる定家様の書付者については次のようにまとめられる。定家様は遠州を中心に付され、主な対象は遠州が選定した中興名物である。遠州以外では、松花堂昭乗など遠州と同じ茶の湯サロンに属した人、小堀権十郎など遠州の子孫、松平不昧をはじめとする遠州に私淑した後の人々があげられる。何れも定家様を能くする人物として知られる人々である。また、遠州以前の人物による定家様の箱書は見られない。つまり、遠州が定家様の箱書における起点となっており、ここに挙げた人々へと拡がっていったことを表している。従来から指摘されていたことを実証する結果でもある。

ここで注目すべきは、林左馬衛氏が「遠州の茶風の確認と展開は、遠州流の茶人たちによるものと、茶道具の鑑識に共感するより広い茶道社

会の人々によるものであって、共に近世茶道史を彩っている」⁽¹⁰⁾と述べるように、遠州による「中興名物」を中心とした箱書も、後世に至るまで遠州流以外の茶人にまで一様に尊重されていることである。『大正名器鑑』における多数の遠州筆跡はこれを示すものである。そして、その多くに定家様が用いられていることから、近世期の定家様享受にあたり、遠州は茶の湯を通して非常に大きな役割を果たしていたと考えられる。そこで遠州の定家様使用に至る過程を再度確認し纏めると共に、近世期における遠州筆跡の享受について考えてみたい。

三、二 小堀遠州の定家様使用に至る背景

小堀遠州（一五七九—一六四七）は、茶人、建築・造園家と多彩な業績を残した江戸初期の大名である。名は政一、号は宗甫・孤蓬庵。豊臣秀吉、徳川家康・秀忠らに仕えた。幕府では、作事奉行・伏見奉行の他、家光の茶道指南を務めている。遠州流茶道・華道の祖でもあり、茶風は公家的な古典美を兼ね備えた「きれいさび」という言葉で捉えられる。遠州の定家様については、小松茂美『日本書流全史（上）』⁽¹¹⁾が「定家流の熱狂的な信奉者として、小堀遠州の右に出るものはない。これは特筆の価値がある。遠州ほど定家流を巧みに掌中したものは、この流のあとにもさきにも類がない。」とする。

調査結果では、遠州による定家様が見られる箱書は、中興名物の茶入に多く見られる。中興名物は遠州の美意識によつて選ばれた名品であることに加え、和歌による歌銘がつけられていることが多い。歌銘は、主に茶器の形状や景色にちなんだ古歌を典拠とするものであり、遠州は特にこれを好んだ。

歌銘については、芳賀幸四郎氏⁽¹²⁾によると、茶杓や茶入に見られる歌銘の多くは遠州あたりから始まる。そして「歌銘の出現は、安土桃山時代における和学の興隆・古典復興の気運を反映したもので、古歌集の

断簡（歌切れ）や和歌の色紙・懷紙が掛物として茶室の床に進出したのと軌を一にする現象で、唐物趣味・禅宗趣味に傾いていた従来の茶の湯の和様化への大きな転換を語るよい指標である」⁽¹³⁾と指摘する。歌銘が定家様と大きく関連することは、『大正名器鑑』の調査結果から明らかであり、遠州と遠州をとりまく文化的背景について検証する必要があると考える。

まず、茶器に用いられる歌銘と似通ったものとして、雅楽器の銘について確認しておきたい。『枕草子』に記されているように、平安貴族の文化として楽器には名前をつける習慣があった。そして「由緒ある楽器には、文学にちなむ雅な銘がつけられ、格別の価値を有する名器としてことのほか大切にされた」⁽¹⁴⁾と言われる。遠州は、このような公家文化の世界を自らの茶の湯に取り入れたかったと考えられる⁽¹⁵⁾。

加えて、歌銘は実用的な面でも有用であった。遠州が歌銘を茶の湯に取り入れた理由について、小堀宗実「小堀遠州が出会ったもの」⁽¹⁶⁾は次のように説明する。

遠州が歌銘を用いたのは、王朝文学を茶の世界に取り入れようとしたことと共に、和歌の技法のひとつである「本歌取り」の手法を導入し瀬戸茶入の窯分に用いる為であった。一番の上物にふさわしい和歌を選んで冠し、それを本歌として、その器と同窯で焼かれ、釉薬・形状が同類の物を〇〇手と称して分類を行った。

つまり、定家が行った本歌取りの手法を、歌銘によつて茶入の分類に用いたと言える。こうして公家文化の最たるものである和歌を取り入れた歌銘は、定家様で記すことによつて、その世界観をより鮮明に映し出すこととなった。定家様とは、定家の和歌世界や公家文化を具現化する効果的な手段であったと考える。実用面からすれば、定家様は明瞭かつ印象的な字形で、木材にも書き易いという利点を持つことから、箱書に適した書風である。しかし、それは結果的に実用的に優れていたのでは

り、公家文化の象徴ともいえる定家の和歌を表す書風であったことが前提と考えられる。

また、遠州が定家の和歌を茶の湯へと取り入れるに至ったのには、当時の茶の湯において、既にその環境が整っていたことも大きい。まず、わび茶の創始者・村田珠光（一四二三—一五〇二）は「心の文」のなかで「此道の一大事は、和漢のさかいをまぎらかす事、肝要く、用心あるべき事なり」と述べる。このことは中国から持ち込まれたこれまでの唐物中心の茶道具に、国産の和物を調和させていくことを意味する。その後、珠光の茶の湯を引き継いだ武野紹鷗（一五〇二—一五五五）は、定家色紙「あまの原」を茶席に用いた。これには、定家の「詠歌大概」を三条西実隆から授けられたことが大きく関与する。この後、和歌懷紙や古筆切が茶掛に使用されるようになるが、概ね定家のものに限られ、遠州に至っても同様であった。

遠州が茶の湯の修得を始めた頃の茶道具については、深谷信子「小堀遠州の職務と茶の淵源—揺籃期」¹⁷⁾に詳しい。『松屋会記』を中心とする調査結果からは、遠州が慶長九年に父・正次の後を継ぐまでの茶会では、既に茶道具は唐物から和物へという流れができていたことがわかる。特に、国産陶器の使用の増加は顕著である。このような当時の茶会の状況下で、遠州も当然ながら和物を多く用いた。これは「和漢のさかいをまぎらかす」珠光に追隨することであった。さらに、これらの国産陶器や竹茶杓といった和物に、遠州は歌銘を命銘した。これには紹鷗をはじめとする同時代の茶人たちが、既に茶の湯と和歌を深く結びつけていたことも多分に影響する。

当時、茶席で用いられる茶掛は、定家の筆跡が重んじられている状況でもあった。小堀宗実「小堀遠州と定家様の書」¹⁸⁾によれば、遠州の茶会では基本的に歌といえば定家のものに限られていたようである。定家を尊重する時流のなかに遠州も身を置き、傾倒していたことがわかる。

だが遠州が独創的であった点は、定家尊重に終始せず、定家の本歌取りの手法を茶の湯に取り入れ、書風を具現化の手段として用いたことにあると考える。

では、遠州の定家様は何処から来たのであろうか。それは、定家の子孫である冷泉家との和歌を通じた交流が大きく関与すると推測する。冷泉為和（一四八六—一五四九）、冷泉為満（二五五九—一六一九）、冷泉為頼（一五九二—一六二七）は、中世末期から近世初期にかけて定家様を能くした冷泉家当主として知られる。うち、為満・為頼親子から遠州は歌を学んだとされる。冷泉家と接するなかで、彼らの定家様に触れる機会は多く、冷泉家が所持する定家様で記された写本を目にする機会も想像できる。

遠州が為頼に就いて定家の書風を学んだ旨は、天保六（一八三五）年の奥書を持つ冷泉家代々の由緒が記された宮内庁書陵部所蔵『冷泉正統記』¹⁹⁾、松平家編輯部『松平不昧傳』²⁰⁾に記されている。二人の関係については、為頼宛ての遠州の書状²¹⁾から、和歌と茶の湯を通じた親密さが窺える。遠州が実際に筆法として学んだ形跡は不確かではあるものの、冷泉家との交流から直接的な影響を受けたと考え得る環境であったことは確かである。

当時、定家様を嗜む武家は遠州に限らなかつたことも注視すべきである。一六世紀、為和や為満の定家様使用を機に、定家様を書く人々が急増する²²⁾。例えば遠州の父・正次も、定家様を嗜んでいた形跡が残される²³⁾。この現象には、冷泉家の和歌活動によるものが大きいと考える。当時の冷泉家は、和歌の教授を通して武家と密接に関わりを保っていた。なかでも定家様を再興させた為和は、駿河の今川氏をはじめ諸国に下向し、歌の指南をしている²⁴⁾。その際に定家子孫として定家様を用いることで得られる効果を、為和は認識していたのではなからうか。少なくとも為和の活動によって、地方の武家階級にまで定家様は知られること

になったと考える。

地方の武家階級に定家様が浸透していたことが窺える資料として、近世初期の武士・豊島忠次（一五六四—一六四三）が定家様で記した謡本『豊島作右衛門 忠次手沢本』（法政大学能楽研究所鴻山文庫所蔵）があげられる。豊島氏は武蔵国を本拠とする関東武士であり、忠次は家康に仕え二〇〇石の代官となった人物である⁽²⁵⁾。定家様の享受が、代官層の関東武士にまで見られることから、当時の武家による定家様享受層の拡がりが見える。

また、遠州に先んじて徳川家康（一五四二—一六一六）が定家様を自身の書に取り入れていたことは、徳川義宣氏⁽²⁶⁾、高橋利郎氏⁽²⁷⁾による指摘がある。家康は定家の和歌のみならずその筆跡にも魅了され、定家の遺墨を蒐集し、臨書していたのである。

家康が定家の遺墨を手にすることができた背景には、為満の存在があった。大谷俊太氏⁽²⁸⁾によると、為満は当時の権力者である戦国大名に冷泉家蔵書を呈することで苦境を脱し、特に家康へは古今伝授も行われ、より強固な関係を築いていた⁽²⁹⁾。そして、家康は古今伝授が天皇制と深く関わるゆえに関心を示したものの、天皇制とは距離を置いたため、それ以上に古今伝授とは関わりなかつたとされる。家康の遺墨からは、定家様との関わり方に関しても、一定の距離が置かれているように感じられる。和歌を享受するなかで定家様にも関心を示し修得した形跡は見られるが、多くの定家様の書き手のように書風をそのままに再現するのではなく、自らの書風に取り入れている程度である。

時の最高権力者である家康が強い興味を示したように、当時の武家階級では王朝文化への関心が高まり、対象は和歌や歌学、古典文学に及んでいた。定家の存在は大きく、これに付随して印象的な書風である定家様も自然と人々の目についたはずである。為和を初めとする冷泉家当主が定家様を用いたこともあり⁽³⁰⁾、当時の和歌と定家様は非常に強い結

びつきとして、武家に受け入れられていったものと思われる。

また、文芸復興への気運によって、古筆の流行が始まる時期とも重なっている。この時期の古筆流行の特色として、武家による定家筆跡の尊重があったことは、藤本孝一「藤原定家の書写と古筆切―『公忠朝臣集』『花山僧正集』を中心に―」⁽³¹⁾が次の様に指摘する。

冷泉為満が豊臣秀次に『公忠朝臣集』、宇喜多秀家に『花山僧正集（定家様部分）』、徳川家康に『僧上遍昭家集』を進上したのは、定家筆跡であったためである。それは、桃山時代の古筆の流行に二つの潮流があり、公家方は平安朝筆跡を尊重し、武家方は主に定家様を尊重した。

武家階級における定家様尊重のなか、遠州の茶の湯によって、歌銘を定家様で表すという効果的な演出が持ち込まれた。それは当時の和歌と茶の湯における時流とも相まって、武家階級に広く受け入れられたものと考えられる。そして、近世期における大きな拡がりへと展開していくことになる。次節では、武家における遠州筆跡の享受の事例から、近世期の定家様享受について考えてみたい。

三、近世期の武家における遠州筆跡の享受

本節では、近世期の武家における定家様享受の具体例の一つとして、土佐藩家老職にあった加賀野井家（桐間家）⁽³²⁾に伝来した古文書について検証していきたい。同家には、近世期を通じた文化的資料が豊富に残されていることから、近世期における定家様享受の変遷を追うことが可能である。

オーテピア高知図書館には、加賀野井家資料として古文書・書籍が寄託所蔵される。加賀野井家は天正一三（一五八五）年から山内家に仕え、家老職など代々藩の要職を歴任し、石高は三〇〇〇石を誇った家柄である。

同家は上方の公家との繋がりが深く、土佐の上方文化の門戸とも言われている。オーテピア高知図書館所蔵の加賀野井家系図『系圖略式全』によれば、第六代から第八代当主は、京都の公家から妻を迎え入れている。残された資料も、入木道、香道、能楽、篆刻等、諸芸全般が多岐にわたる。土佐藩主山内家のコレクション形成にあたって、加賀野井家は少なからず関わりを持っていたことが推測される。

例えば「御子左家藤原為家卿砂子地切九枚継巻物箱入」（加賀野井家資料五四—一）からは同家の文化水準が窺われる。定家の子であり御子左家嫡男・藤原為家（一一九八—一二七五）書写とされる歌と、狩野益信（一二二五—一六九四）による絵が交互に貼られた卷子本であり、古筆了珉（一六四五—一七〇一）の極札が添えられている。

このような加賀野井家に伝承された資料からは、まず近世期における定家筆跡の尊重が認められる。近世初期の資料として、「忠豊献上定家小色紙写」（加賀野井家資料七一—五七）が残される。三代藩主・山内忠豊（一六〇九—一六六九）が將軍家に献上した定家色紙の写しといわれる。「忠豊公為御遺物御献上之定家小色紙之寫」との記載から、定家様ではないが原寸大での写しと考えられる。近世前期における定家色紙の流行を表していると共に、同家が土佐藩の文化面を担っていたことが想像される。

近世後期の資料としては、定家筆跡とされる扁額の写しが残される。当時、能書家が揮毫したと伝承される寺社の扁額の模写は盛んに行われた形跡があり、手本としても用いられていた⁽³³⁾。「花山院右大臣常雅公真蹟外写」（加賀野井家資料五四—二七）は、花山院常雅を初めとした複数の人物による二十二種の扁額が籠字で写される。うち一つに「大和國吉野郡川上莊多古村秋光山心月院藏 原木 京極黃門定家卿真蹟」として「時雨亭」の文字が定家様の籠字で書写されている。

この二点の資料からは、定家筆跡への強い関心は、近世期全般に及ん

でいることがわかる。同時に、定家遺墨は所持できるものから手の届かない存在へと変化していったことも想起させる。

ここで、加賀野井家が仕えた土佐藩主山内家に目を向きたい。土佐藩主山内家では、大名家に相応しく膨大な数のコレクションを形成していた。明治二一（一八八八）年から明治二五（一八九二）年にかけて山内家職員によって行われた御道具調査「御道具根居」⁽³⁴⁾からは、このコレクションを見渡すことができる。当資料のうち御掛物の分類からは、定家遺墨として「定家卿文」「定家卿筆詠歌大概」「定家卿小倉山色紙」の三点、遠州遺墨として「小堀遠江守筆独の書」「小堀遠州公筆此哥書両冊ノ文」の二点が確認できる。これらは、『大正名器鑑』の箱書の書付者としても名が散見される利休、織部、石州、松花堂、江月、不昧といった人物による遺墨の掛物と共に記載されていることから、茶掛として用いられていたものと考えられる。

山内家におけるコレクションからは、近世期における定家筆跡の尊重と愛好が認められ、それは茶の湯の席において愉しまれていたと見受けられる。そして、遠州の遺墨が遠州流門下に限らず享受されていたことも示している。山内家は、二代藩主・忠義、四代藩主・豊昌が片桐石州（一六〇五—一六七三）に茶を学び、茶道方も代々石州流が続いており⁽³⁵⁾、遠州流ではない。だが、石州は遠州のあとをうけて徳川將軍の茶道指南を務め、「小堀遠州において完成された大名茶を、真の意味で大名間にひろめた人物」⁽³⁶⁾とされる。実際に近世末期に至るまで、石州流の大名家は非常に多い。そして石州流の諸大名は、遠州の茶道具の鑑識への共感も相まって、その遺墨を蒐集・鑑賞の対象としている。また、山内家のコレクションには、定家様を能くした近世後期の大名茶人である松平不昧、酒井宗雅、溝口直諒の遺墨が蒐集されており、近世期の定家様享受の流れも一望できる。上記三者については後述とするが、いずれも石州流門下である。このような大名茶人による遠州遺墨の享受は、

近世期における定家様享受とも大きく関係すると考える。

遠州遺墨の享受は大名家にとどまることなく、その家臣においても同様であったことを、加賀野井家の次の資料は示している。「〔駒〕□□書状 桐間将監（守卓）宛」（加賀野井家資料二―一五九）は、天保一四（一八四三）年九月一二日付、桐間家第九代当主・桐間守卓（一八二四―一八七四）³⁷宛ての書状である。内容の大意は、遠州筆跡として古筆了珉の極札を貰うには銀二匁³⁸が必要であり、先方とは付き合ひがあるため今後も取次が可能といったものである。また、津田弥右衛門という人物を介して書状が授受されていたことも追伸からわかる。

この書状からは、まず家臣の加賀野井家においても遠州の遺墨が蒐集されていたことが示される。書状との関係は不明であるが、同家には遠州の書も残されていたようである³⁹。茶の湯に通じていた加賀野井家の資料に示されるように、遠州筆跡の享受は大名家に留まることなく、茶の湯と共に裾野を広げていったものと考えられる。

そして、記載される古筆了珉（一六四五―一七〇一）は古筆鑑定家・古筆宗家五代である。了珉が鑑定を行っていた年代は遠州の没後間もなくであり、書状の年代とは一致しない。当時の極札を巡る事例⁴⁰を示す貴重な資料であると共に、遠州遺墨の価値をも示している。

人々が遠州の筆跡を求めた理由の一つには、遠州の定家様を通して定家の世界を見ていたことにあると考える。遠州が茶の湯に和歌を歌銘として取り入れ、定家様で記した効果でもあるが、この背景には、定家の筆跡を目にすることはごく一部の人に限られていたという当時の現状があった。近世期において定家の遺墨を入手することがいかに困難であったかは、次の資料が示している。

まず近世前期では、既に定家遺墨は大変な高額で取引されており、正保二年（一六四六）『古筆名物類聚 十五』歌之物には、「定家卿二首之懷紙」添状七通のうち一つに「二千両買上手形一枚」の記載がある。そ

して、加賀野井家書状と同時代である天保一二（一八四一）年『茶家醉古襟』の「古筆切代附」によると、遠州の遺墨は金一両であるのに対し、定家は「金 両」という記載で金額は空欄となっている。

近世期における茶の湯の拡がりは、定家の遺墨に接することができる享受層の範囲をはるかに超えていた。当時の茶人にとって遠州の定家様は、定家の世界への橋渡しとしての役割を担っていたのではなからうか。

四 定家様と篆隸体

四 一 調査結果と考察

『大正名器鑑』での調査結果は、近世期特有の定家様享受の姿として、書体の書き分けがあったことも示している。この点について、定家様が篆隸体と対になって用いられていることに着目し検証を行いたい。

まず、書体は基本的に書付者によって一定の傾向がある。これには、箱書を付した書付者の書体に対する認識や美意識、得手不得手など、各人やその属性に起因するところが多い。『大正名器鑑』を見渡すと、概ね遠州ゆかりの書付者は定家様・篆隸体が多く、千家ゆかりの書付者は行草体が多いという傾向を持つ。楷書体については、これ以外の書付者や書付者の記載が無いことが多い。さらに、遠州ゆかりの人物による定家様と篆隸体は、対になって用いられることが多々あるという特徴を持つ。

定家様と篆隸体の対の多くは、仮名は定家様、漢字は篆隸体である。特に遠州は巧みに使い分けている。定家様の仮名と隸書体の漢字については従来から指摘されており、竹内順一「大名茶人と定家様」⁴¹は次の様に述べる。

仮名の定家様と漢字の隸書に共通するのは、両者とも文字それ自体が訴える力が強く、〴〵明示性〴〵にすぐれていることであり、遠州はさらにこの両者を定型化して、様式の美〴〵へと発展させたのである。

また、名児耶明「定家様という書の個性」⁽⁴²⁾は、

定家様は一字一字が明瞭で、字数の少ない箱書には適している。また、漢字の中でも 隸書のやや扁平で四角な字形は、定家様の仮名と印象が近く相性が良い。江戸時代の茶道具の箱書に定家様の仮名と隸書が多い理由であろう。

と字形の観点から言及する。

用筆については、両者は二折法⁽⁴³⁾を用いるという共通点を持つことも指摘されている⁽⁴⁴⁾。加えて、連綿や渴筆を用いない、濃墨を使用することが多いという共通点も持つ。このように書体を持つ特性や字形・用筆から生じた相性の良さにより、二者は組み合わせられ、箱書に用いられたと考えられる。それは、隸書体と定家様の筆法が組み合わせられた漢字の書付に対してそれほど違和感がないことからわかる。例えば、茶入「下枝」箱書は、「下」の一目目は波磔を用いた隸書体、「枝」の木部は定家様の筆法を用いている。異なる字形の二文字が組み合わせられているのである【図二】。更には、漢字一文字のなかに、隸書体と定家様の筆法が共に見られる事例もある。

また、隸書体と組み合わせ可能な仮名字形は、定家様のみであったと考えられる。通常の仮名は、定家様のような太い線を用いることはなく、



【図2】 茶入「下枝」箱書

連綿を用いることが多い。そのため、共に使用する場合の漢字は、自ずから行草体に限られるからである。

そして、遠州は茶の湯における唐物尊重から、隸書体はより中国的な書風として認識していたことを島谷弘幸「隸書の復活」⁽⁴⁵⁾は指摘する。定家様は、この中国的な隸書体に対応する日本的な書風として取り入れることが可能であったことも大きい。定家様の仮名と隸書体の漢字を同時に使用したことは、「和漢のさかいをまぎらかす事」の具現化の一つであったはずである。

ただし、従来の指摘では箱書の書体は隸書体とされているが、『大正名器鑑』を見渡したところ、篆書体や、篆書体と隸書体が混合したような字形も見られた。これに装飾性が加えられた字形も確認できる。隸書体だけでなく、これら全体を含めて、定家様の仮名と組み合わせたいものと考えられる⁽⁴⁶⁾。よって、本稿では篆隸体と称することとする。尚、篆書体と隸書体は、共に明瞭で印象的な性質や格の高さにより、刀に刻まれる銘や、雅楽器の箱書に記される銘など、茶器以外の銘にも多くの使用例が見られる。銘以外では、石碑の碑銘、版本の題字には頻繁に見られるものである。

『大正名器鑑』に見られる篆隸体は、松花堂昭乗や江月宗玩といった遠州とは茶の湯を通した同じコミュニティに属する禅僧によるものが散見される。遠州も禅宗に帰依しており、そもそも禅宗と茶の湯は成立時から深い関係にある。川畑薫「東京国立博物館・藤田乗因筆「六六武将賛」について—松花堂流の志向した「書き分け」をめぐる考察—」⁽⁴⁷⁾では、松花堂昭乗周辺で隸書体や篆書体を自己の表現として積極的に受容しようとする姿勢が現れており、装飾性を意識していたことが指摘されている。『大正名器鑑』で見られる篆隸体は、これと同じ性質を持つと考える。表現の一つとして遊び心やデザイン性が含まれた篆隸体の字形も見受けられるのである。例えば茶入「島物耳付」箱書での「耳」の文字は、耳

の形を模したユニークな字形である【図三】。また、茶入「虫咀藤節」箱書での「虫」の文字は、虫食い跡を模した字形であり、両者とも銘に因んだデザイン化がなされている。

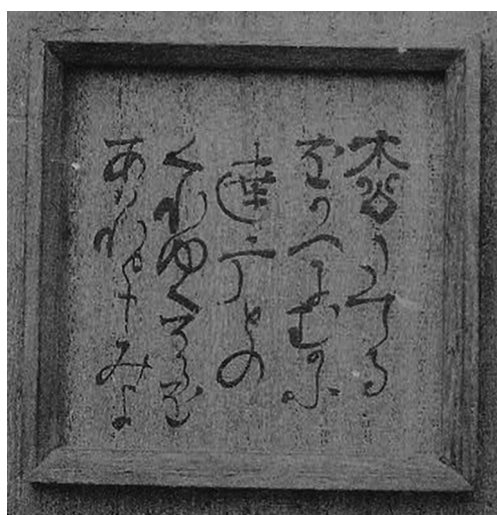
禅宗では、早くから篆隸体の享受が確認できる。一四〇〇年代の禅僧による詩画軸には、楷書体の詩と画に篆書体の題字が添えられており、既に篆書体の享受が見られると共に、書体の書き分けがなされている⁽⁴⁸⁾。また、隸書体については、慶長九（一六〇四）年に隸書体を含む四種の書体手本が記された「千字文」が禅僧により出版されている⁽⁴⁹⁾。室町期には禅宗の中に篆隸体は浸透していたと考えられる。

篆隸体が自己表現や装飾性といった要素を含む書体となっていた一因として、室町期の京都五山における禅林サロンでの書に対する共通意識があげられる。徳田和夫氏⁽⁵⁰⁾、笠嶋忠幸氏⁽⁵¹⁾は、室町期には京都五山の禅僧たちによる書の遊戯性が感じられる作品が残されており、後に見られる書表現の自由や遊戯性の基盤となっているとの見解を示す。篆隸体と共に用いられた定家様も、このような土壌があつてこそ享受され、篆隸体と共に展開した自由な書表現の一つであつたと考えられる。茶入「岡邊」箱書はそれが表れた顕著な例であろう。ここでは遠州による定家様の和歌が記されているが、「松」のみ篆隸体であり、その字形はデザイン性を含んでいる【図四】。そして、禅僧による定家様の享受は、篆隸体と対にした場合に限ることなく享受されていたことも、茶碗「白鷗」箱書での昭乗による定家様の漢詩は示している【図五】。

川畑薫「松花堂昭乗と小堀遠州」⁽⁵²⁾は、茶道具の箱書にふさわしい書として隸書や定家様を用いたことは、彼らの間で共通の教養や美意識が共有されていたと示唆する。篆隸体と定家様の使用には、漢字が篆隸体、仮名が定家様という使い分け以外にも、共通の教養や美意識によって作られた一定の法則性と、その継承が見受けられる。まず、『大正名器鑑』には、箱表には銘が篆隸体で記され、箱裏には銘に因んだ和歌が



【図3】 茶入「島物耳付」箱書



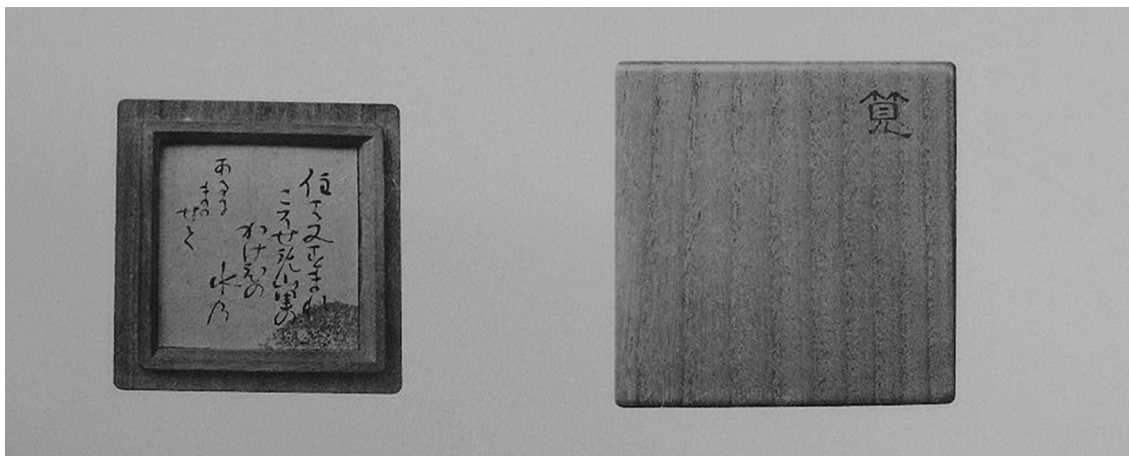
【図4】 茶入「岡邊」箱書

定家様で記されたものが散見される【図六】。特に遠州によるものは多い。そして、箱表に分類と銘が同時に記される場合は、分類が篆隸体、銘が定家様になることが多々ある。その多くは銘が仮名表記となる。ただし、松平不昧による箱書では、銘が漢字であっても定家様を用いている。茶碗「蓑虫」箱書では「高麗 茶碗」が隸書体、「蓑虫」は定家様で記される【図七】。これらの事例をまとめると、まず和歌は定家やそれに付随する王朝文化を表すものとして定家様で記すことは、彼らにとつては必須であった。そして、銘と分類の場合は、銘は和歌に準ずるものとして定家様となり、分類は篆隸体となる。このような書き分けが行われていたと考えられる。

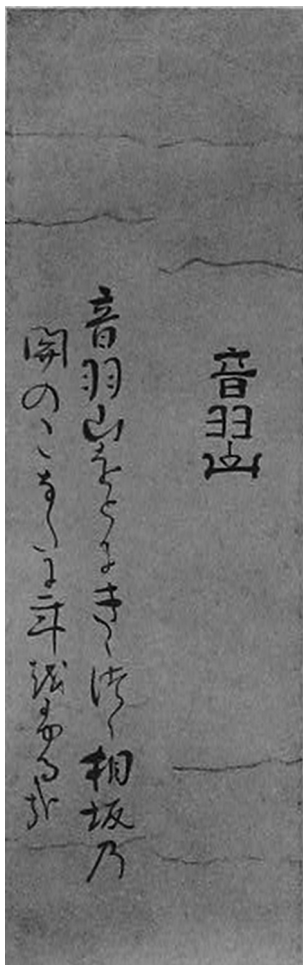
これまでに述べてきた箱書に見られる定家様と篆隸体は、「字形」と



【図5】 茶碗「白鷗」箱書



【図6】 茶入「寛」箱書



【図8】 茶入「音羽山」
遠州筆添掛物



【図7】 茶碗「蓑虫」箱書

呼ばれる書付方法によるものも多い。この技法は、墨書を写し、その形通りに漆を置いて金粉や銀粉を蒔いて蒔絵とする。これによって、記された文字はより装飾性を増す。字形の場合、書付は本人の自筆ではないため、後世の人によって文字が組み合わされた可能性もある。言い換えれば、定家様と篆隸体の使用に見られる法則性は後々まで踏襲されていたと言える。

また、行書体の一部分に定家様の筆法、または楷書体の一部分に篆隸体の筆法が混在する微妙な字形も見られる。定家様と篆隸体が、箱書きの字形として浸透しており、これを取り入れようとしたものと考えられる。

そして、定家様と篆隸体の対での使用は箱書に限らない。茶入「音羽山」には遠州筆の添掛物が付される【図八】。これには、料紙に銘と和歌が同時に記されるが、やはり銘は篆隸体、和歌は定家様なのである。この場合、銘の篆隸体は題字のような役割を持ち、定家様の和歌をまとめている印象を受ける。次節では、『大正名器鑑』に名がある大名茶人による同様式の作品事例を取り上げたい。

四 二 近世後期の大名茶人たちによる定家様と篆隸体の享受

本節では、『大正名器鑑』にも名がある近世後期の三人の大名茶人に焦点をあてる。彼らは箱書以外にも定家様と篆隸体を用いた作品を多く残している。両字形の使用に関して、対象を箱書から作品事例に広げ、定家様享受の展開について考察を試みたい。

まず、近世期における定家様の享受者として知られる松江藩主・松平不昧（治郷・一七五一—一八一八）についてである。『大正名器鑑』にも書付者として名が見える。『古今名物類從』の編纂など茶道具の研究や蒐集を行った大名茶人として知られる。遠州に私淑し、その書風である定家様を能くした人物であり、篆隸体で記されたものも多く残る。「不昧の箱書は、不昧が私淑した小堀遠州の箱書のスタイルを継承したものの」⁽⁵³⁾とされ、『大正名器鑑』での調査結果もこれを裏付ける。定家様と篆隸体が用いられる様式であり、その書き分け基準も遠州に倣っている。

不昧による定家様での遺墨は多く、箱書と同様に篆隸体と定家様という組み合わせで表現された作品も多い。例えば、吉兆所蔵「比良暮雪図」⁽⁵⁴⁾は狩野伊川院の画に、篆隸書体で「比良暮雪」、定家様で「雪はる、ひらの高根の夕くれははなの盛りにする春かな」と添える。篆隸体の題と定家様の和歌での賛である。字形の書き分けによる様式は、茶の湯での箱書の世界に留まるなく、作品へと拡がっていることがわかる。さらに、この書き分けにやや変化が加わった作品がある。篆隸体の題は大きく、定家様の和歌は小さく書かれる様式の作品である。一例として「春月」⁽⁵⁵⁾は、篆隸体をややデザイン化した字形で「春月」と大きく書かれ、定家様の和歌が小さく書かれる。また、可部屋集成館所蔵「岩浪」⁽⁵⁶⁾は、篆隸体で「岩浪」と大きく書かれ、「山深く流れての世のにぎりをは知るとも見えぬ滝のいわなみ」と定家様の和歌が小さく書かれる。先の「春月」であるが、「月」の文字は、月夜が連想される字形に

デザイン化されている点も興味深い。『大正名器鑑』の箱書でもしばしば見られるが、漢字の意味に因んだ字形へとデザイン化されている。このような文字のデザイン化も含めて、共通の美意識に基づいた表現が不昧へと踏襲されていったと考えられる。

この不昧を師と仰ぎ、私淑した大名茶人がいた。姫路藩主・酒井宗雅（忠以・一七五五—一七九〇）である。『大正名器鑑』の書付者としても名がある。短い生涯であったが、風雅を好んだ大名茶人として知られる。不昧から直接指導を仰ぐ機会は少なかったとされるが、往復書簡が多数残っている⁽⁵⁷⁾。

宗雅の作品からも、定家様と篆隸体での書き分けが見られる。例えば「楼閣山水画賛」⁽⁵⁸⁾は、狩野高信の画に、宗雅が篆隸体の漢詩と定家様の和歌で賛を添えている。そして、両字形共に定家や遠州というより不昧の字形に酷似していることから、不昧からの直接的影響も考えられる。

宗雅が記した茶会記『逾好日記』⁽⁵⁹⁾の文字は、篆隸体の字形に、線の揺れや雫型の太い線など定家様の特徴が含まれた書風である。定家様と篆隸体を好み、茶会記での使用に適した字形という意識を持っていたことを示している。また、筆法として共通性があるゆえ、このような書風が可能になったとも言える。

宗雅の遺墨からは、定家・遠州・不昧・宗雅という定家様の流れが見える。それぞれが私淑した人物の筆跡を尊重したゆえに定家様を取り入れ、それが茶の湯を介して脈々と続いているのである。近世期における定家様享受の一つの形と言える。

次に、新発田藩主・溝口翠濤（直諒・一七九九—一八五八）に目を向きたい。翠濤は、溝口家の充実した茶道具コレクション形成に大きく関わった大名茶人である。このコレクションには、『大正名器鑑』に所載が確認できるものもある。

東京大学史料編纂所には、翠濤直筆による多数の資料が溝口家資料として所蔵される。翠濤が定家様を能くした人物であったことは、これらの資料に示される。その一つとして、『十二月茶杓』（溝口家資料一七八）がある。小堀宗中・宗本・蓬露による茶杓及び茶筒を写したものであるが、小堀家の人々による定家様での書付部分は、翠濤によって書き写されている。また、この資料からは小堀家との親密さも窺える。茶の湯を通して小堀家と親しい交流があったことは、宮武慶之「溝口翠濤の茶の湯を交流」⁽⁶⁰⁾により示されている。そして、翠濤が不味と懇意にしていた道具商・了我（不明——一七五三）とも交わっていたとする同氏「江戸の道具商・本惣・了我、了芸の活動に注目して」⁽⁶¹⁾の論も加味すると、翠濤は茶の湯を通して定家様に接していたと考えられる。

翠濤は定家様を学ぶにあたって、『定家卿書法』（溝口家史料一六）を参考としたようである⁽⁶²⁾。『定家卿書法』は、定家様の書法が記された伝書である。翠濤は茶の湯を介した友人である久居藩主・藤堂高柊から、これを借用し臨書している。二度にわたり臨書をしている上に、『定家卿書法序』が別冊として残されており、この伝書への愛着が窺える。本文は流暢な定家様で書かれており、定家様の修得者であったことがわかる⁽⁶³⁾。

定家様を能くした翠濤による作品が、『呈公卿書畫縮寫』（溝口家資料一六一）では複数見ることができる。当資料は、公家⁽⁶⁴⁾などに進呈した翠濤による書画を、翠濤自身が縮写したものである。手元に控えとして残しておくためであったと考えられる。そこには、篆隸体・定家様で書かれた作品が多く記載されている。両字形共に堪能であり、表現方法として好んで用いていたことがわかる。そのうちの数点は、不味と同じく篆隸体で大きく書かれた題に、小さな定家様で和歌が添えられる様式を持つ【図九】⁽⁶⁵⁾。

これらの東京大学史料編纂所蔵の溝口家資料から、翠濤は茶の湯を媒

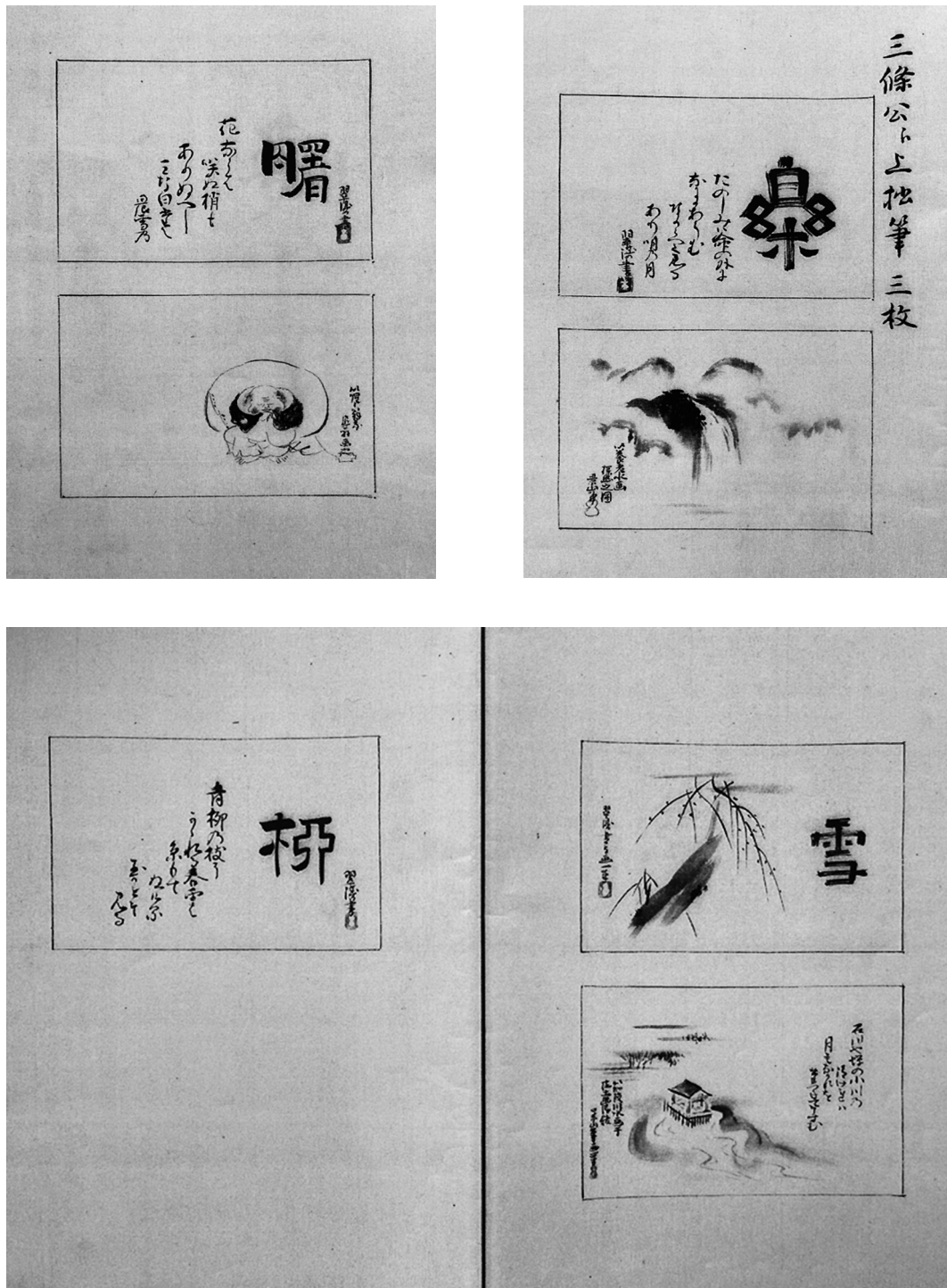
介として定家様を修得し、それを自らの表現にまで用いていることがわかる。これは近世期に見られる新しい定家様享受の様相と言える。

以上三者の大名茶人の事例からは、共通点があげられる。まず、三者は石州流に属しているが、茶人・遠州に私淑し、茶人として同じ価値観が前提としてある。その上で、篆隸体・定家様を用いている。篆隸体では、口部に三角形や菱型を多用するなど、やや特殊な字形の踏襲も見られる。そして、篆隸体・定家様の使用は茶道具の箱書に留まることなく、書画作品にも及んでいる。書表現もしくは画も一体とした作品としての表現に用いられるという字形享受の姿に、大きな特徴が見出される。同じ価値観を持った人たちによって、特定の字形が自己の美意識の表現方法として用いられるという興味深い事例である。

なかでも、篆隸体の大字と定家様の小字が対になった様式は特筆すべきである。この場合、篆隸体は一〇三文字と字数は少なく題字のような役割であり、定家様は多字数で多くは和歌である。この様式を辿つてみると、禅宗からの影響が考えられる。

まず、京都・妙心寺所蔵の国宝「大燈国師墨蹟 関山字号」（一三二九年）を参照したい。これは、禅宗において師が弟子に与える号と偈頌を記した号偈である。号「関山」は大字で書かれ、漢詩の偈頌は小字で書かれている。この様式は、篆隸体大字での題と定家様小字での和歌と同様の構図と言える。少字数と多字数の組み合わせであることから、大小の文字による構成は自然な流れでもある。

次に、墨蹟が使用された記録が茶会記に多く残る一休宗純（一三九四—一四八一）の号偈を見たい。畠山記念館所蔵「尊林号偈」、正木美術館所蔵「滴凍軒号偈」⁽⁶⁶⁾は、号は大字・漢詩の偈頌は小字という同様の様式を持つ。ただし「大燈国師墨蹟 関山字号」は横形であるが、これらは縦形となる。これに関しては、同時代の雪江宗深（一四〇八—一四八六）による号偈「玉衡」について「もとは堂子にかけのために横



【図9】 東京大学史料編纂所蔵『呈公卿書畫縮寫』

形式の大幅が主流であったが、茶の湯が広まり床の形が変化すると、それに合わせて本作のような横長の形式へと変化したようである」⁽⁶⁷⁾との指摘から、号偈が茶の湯の席で用いられていたゆえの変化であることがわかる。

以上のように、小字数の大字と多字数の小字という構図は、禅僧の間では見慣れたものであり、茶の湯の席でも目にするものであった。この構図がもととなり、題は篆隷体の大字・和歌は定家様の小字という書き分けの様式へと変化したと考える。

また、大字と小字が組み合わされた書作品は、近世期には散見される。禅僧・隠元隆琦（一五九二—一六七三）による出光美術館所蔵「七言二句 一幅」は、一文字目を大きく書き、その脇に二文字目以降を小さく書くが、この形式は当時流行した様式であることが示唆されている⁽⁶⁸⁾。篆隷体の大字による題と定家様の小字による和歌という様式は、近世期の茶の湯愛好のなかで、禅宗との深いつながりから転じた定家様享受の一つの姿であると考えるが、当時の書表現における流行とも共通するのではなからうか。

おわりに

本稿では、『大正名器鑑』における箱書の調査結果から得られた傾向について、近世期の武家階級における事例を中心に考察を試みた。その結果をまとめると以下になる。

『大正名器鑑』での記載に見られるように、茶の湯における遠州の箱書は特別な存在であった。それは、茶道具に歌銘をつけ定家様で記すという効果的な演出を、茶の湯の世界で生みだしたことに起因する。当時の武家階級では既に定家様は流行の兆しがあり、和歌と茶の湯における時流とも相まってこの演出が受け入れられる基盤ができていた。

定家様と共に用例が多い篆隷体については、当時の総括的な少字数へ

の使用や装飾性の形跡から、遠州と近い関係にある禅宗からの影響が考えられる。定家様と篆隷体は、字形の性質から相性がよく、篆隷体は漢字・定家様は仮名という役割分担も可能であった。この二つの字形が対となった場所が茶の湯コミュニケーションであり、箱書はその産物であったと考える。

そして、遠州の定家様は近世期における茶の湯の拡がりと共にあった。これには石州流の大名茶人が遠州を尊重したことが大きく関わっていると考えられる。武家のなかでは大名に限ることなく享受層の拡がりも見られる。また、大名茶人間での交流を通じた定家様の拡がりも顕著である。その代表が松平不昧、酒井宗雅、溝口直諒といった人物である。彼らの定家様享受には、遠州による定家様の筆跡が大きく関与した。遠州への大名茶人としての尊重や茶道具の鑑識への共感に加え、そこには定家筆跡の投影があったと考えられる。

武家から生じた定家様の享受は、篆隷体も含め新しい展開を近世期に見せるようになる。遠州に共感した大名茶人たちによって、定家様を踏襲していく流れができたのである。そして、これまでは定家の筆跡を蒐集して鑑賞するという享受が主であったが、この享受層では、定家様を自身で書いて愉しむ姿が見られるようになる。『定家卿筆道』⁽⁶⁹⁾と称される定家様書法が記された一連の伝書が、近世期に広まりを見せた一因もここにあると考える。

以上の調査結果とこれに伴う検証から、近世期に見られる定家様享受の様相は、定家様と篆隷体を共に様式美として捉えた遠州とそのコミュニケーションを起点として、遠州に共感した茶人たちによる継承と展開が大きく関与した事象と捉えられる。

また、本稿では近世期の武家に焦点を当て考察を試みたが、今後は対象を広げて調査を継続していくことで、より多角的に定家様享受の実像に迫りたい。

注

- (1) 五島美術館『特別展「定家様」』では、「遠州流・冷泉流・不味流をも一括して、広義の「定家様」とよぶ」と定義する。近世期の箱書筆者にその意識はないが、本稿では遠州流・冷泉流・不味流に属する筆跡を扱うにあたり「定家様」の用語で統一する。
- (2) 林屋晴三「大正名器鑑 補説」(アテネ書房、一九九七年) 八頁。
- (3) 名児耶明「遠州の箱書と歌銘」(五島美術館『遠州の観た茶人』、一九九六年)。
- (4) 藤原みずき「『大正名器鑑』に収録される遠州命銘及び箱書付歌銘茶入一覽」(関西大学国文学会『國文學』一〇七卷、二〇一三年三月)。
- (5) 宮内素玄著『鑑定暗の明かり』(川瀬一馬『安田文庫叢刊 第二篇』一九三八年) 二二—二七丁参照。
- (6) 小田榮一『茶道具の箱と箱書』(淡交社、二〇〇三年) 一二頁。
- (7) 前掲注(6)、八頁。
- (8) 例えば、小堀遠州について「宗甫」と記載される場合、「宗甫(遠州)」のように記した。
- (9) 「貼紙」は「貼紙」「張紙」の記載、「額彫」は「額彫」「凹彫」「彫銘」の記載があるが、『大正名器鑑』の記載通りとした。
- (10) 林屋辰三郎編『角川茶道大事典』(角川書店、一九九〇年) 本編五一—七頁。
- (11) 小松茂美『日本書流全史(上)』(講談社、一九七〇年) 五九六頁。
- (12) 芳賀幸四郎『近世文化の形成と傳統』(河出書房、一九四八年) 参照。
- (13) 芳賀幸四郎『歌銘』(国史大辞典編集委員会編『国史大事典 第二卷』(吉川弘文館、一九八〇年) 一〇八頁)。
- (14) 国立歴史民俗博物館『特別企画 紀州徳川家伝来の楽器』(歴史民俗博物館、二〇〇五年) 七頁。
- (15) 遠州は、幾つもの名物製の仕覆や蓋、箱を誂え、歌銘を付けるという装飾を茶入に施した。雅楽器も美しい箱や袋に収められ、由緒書など多くの付随品と共に伝えられている。両者はこの点においても共通性が認められる。
- (16) 小堀宗実「小堀遠州が出会ったもの」(小堀宗実監修『大名茶人・遠州400年 小堀遠州 美の出会い展』朝日新聞社、二〇〇七年)。
- (17) 深谷信子「小堀遠州の職務と茶の淵源—揺籃期」『野村美術館研究紀要 第二十六号』(野村美術館、二〇一七年三月) 六一—一三頁。
- (18) 小堀宗実「小堀遠州と定家様の書」(日本女子大学日本文学科『日本女子大学叢書二〇 定家のもたらしたもの』翰林書房、二〇一八年三月) 一六三—一六四頁。
- (19) 国文学研究資料館「国書データベース」<https://doi.org/10.20730/10028087>。
- (20) 松平家編輯部『松平不味傳』(慶文堂書店、一九一八年)。
- (21) 小堀宗慶「小堀遠州の書状」(東京堂出版、二〇〇二年) 七四—八一頁。
- (22) 名児耶明「定家様と小倉色紙」(『和歌文学論集』編集委員会『百人一首と秀歌撰』一九九四年) 参照。
- (23) 名児耶明「定家様の流れ(早わかり)」『定家様人物年表』『特別展「定家様」』(五島美術館、一九八七年)。
- (24) 小川剛生「角川選書五七二 武士はなぜ歌を詠むか 鎌倉將軍から戦国大名まで」(KADOKAWA、二〇一六年) 参照。
- (25) 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編『新訂 寛政重修諸家譜 第九』(続群書類完成会、一九六五年) 一七六頁。
- (26) 徳川義宣「徳川家康の晩年の手習と手本—定家様書道の草創を周って」(『金鯢叢書 第十一輯』徳川黎明会、一九八四年三月)。
- (27) 高橋利郎「新出の模写本「熊野懷紙」(河辺落葉・旅宿冬月)」と徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について」(大東文化大学書道研究所『大東書道研究』二〇一七年三月)。
- (28) 大谷俊太『和歌史の「近世」道理と余情』(ぺりかん社、二〇〇七年) 二〇四—二一五頁。
- (29) 冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 第四十七卷 豊後国風土記 公卿補任』(朝日新聞社、一九九五年) 解説に、為満による古文書・典籍の閲覧と献上に関する一例が詳細に記される。
- (30) この時期の冷泉家による定家様使用例として、皇居三の丸尚蔵館蔵「和歌懷紙・詩歌懷紙張交屏風」があげられる。一六一—一七世紀にかけての公家四人による懷紙が張り交ぜられているが、定家様で記しているのは冷泉為満のみである。和歌懷紙の書法に多くの制約があり書風についても同様であるなか、冷泉家当主のみが定家様を

- 使用していることは注視すべきである。皇居三の丸尚蔵館『開館記念 皇室のみやびー受け継ぐ美ー 第三期 近世の御所を飾った品々』(皇居三の丸尚蔵館、二〇二四年) 二三頁参照。
- (31) 藤本孝一「藤原定家の書写と古筆切ー『公忠朝臣集』『花山僧正集』を中心にー」(片桐洋一編『研究叢書二七六 王朝文学の本質と変容 韻文編』和泉書院、二〇〇一年)。
- (32) 近世期には「桐間」姓を名乗っていたが、明治維新を機にそれ以前の「加賀野井」姓に戻した。
- (33) 国立歴史民俗博物館『企画展示 いにしえが、好きっー近世好古図録の文化誌ー』(歴史民俗博物館振興会、二〇二三年) 七三頁。
- (34) 土佐山内家宝物資料館「資料紹介「御道具根居」(中)」(土佐山内家宝物資料館『財団法人 土佐山内家宝物資料館 研究紀要 第二号』二〇〇四年三月)。
- (35) 高知県立高知城歴史博物館(公益財団法人土佐山内記念財団)『土佐藩主山内家資料の世界』(高知県立高知城歴史博物館、二〇一七年) 二九頁。
- (36) 熊倉功夫『小堀遠州茶友録』(中央公論新社、二〇一〇年) 二八九頁。
- (37) オーテピア高知図書館所蔵の加賀野井家系図『系圖略式全』によれば、桐間姓から加賀野井姓に戻した人物である。
- (38) 筆跡からは「銀二両」の可能性も考えられる。
- (39) 常石芳英「加賀野井家の武具と古文書」(秦史談会『秦史談 第四一号』一九九一年一月)。
- (40) 当時頻繁に行われていた極札の改竄については、中村健太郎「贋極札ー古筆鑑定書の改竄と偽造ー」(『古筆鑑定必携 古筆切と極札』淡交社、二〇〇四年) 参照。
- (41) 竹内順一「大名茶人と定家様」『特別展「定家様」』(五島美術館、一九八七年) 二〇三頁。
- (42) 名児耶明「定家様という書の個性」(淡交社『月刊なごみ 通巻五三〇号 第四五巻二号』二〇二四年二月) 二八頁。
- (43) 点画を二段階に分けて書くこと。ちなみに楷書体は起筆・送筆・収筆の三折法である。
- (44) 別府節子「定家様と中世の古筆」(日本女子大学日本文学科『定家』のもたらしたもの 日本女子大学叢書二〇『翰林書房、二〇一八年) 一五〇・一五一頁。
- (45) 島谷弘幸「隷書の復活」(古筆学研究所『水荃 第七号』一九八九年九月)。
- (46) 本稿での調査項目における書体は、この意味も含めて篆隸体とした。尚、本稿では篆隸体としてまとめて論ずる。
- (47) 川畑薫「東京国立博物館・藤田乗因筆「六六武將賛」についてー松花堂流の志向した「書き分け」をめぐる考察ー」(東京国立博物館『MUSEUM 第五九九号』二〇〇五年二月)。
- (48) 奈良国立博物館「聖と隠者ー山水に心を澄ます人々ー」(奈良国立博物館、一九九九年) 一三三頁。
- (49) 反町茂雄「古版本聚芳 上下二冊」(文庫の会、一九八〇年)。
- (50) 徳田和夫「詩」を建てる」(岩波書店『文学 九、一〇月号』二〇〇九年九月)。
- (51) 笠嶋忠幸「日本の書の造形意識と遊戯性について」(出光美術館『出光美術館研究紀要 第一六号』二〇二一年一月)。
- (52) 川畑薫「松花堂昭乗と小堀遠州」(野村美術館学芸部『野村美術館研究紀要 第二六号』野村文華財団、二〇一七年三月)。
- (53) 畠山記念館「大名茶人 松平不昧の数寄ー「雲州蔵帳」の名茶器ー」(畠山記念館、二〇一四年) 四六頁。
- (54) 納屋嘉人編『淡交別冊 松平不昧 茶の湯を極めた松江の名君』三八頁。
- (55) 前掲注(54)、三一頁。
- (56) 島根県「しまねバーチャルミュージアム」<http://www.v-museum.pref.shimane.jp>。
- (57) 茶道資料館「茶会記にみる茶道具ー姫路藩主酒井宗雅の茶と交遊」(茶道資料館、二〇二二年) 参照。
- (58) 前掲注(57)、九九頁。
- (59) 前掲注(57)。
- (60) 宮武慶之「溝口翠濤の茶の湯を交流」(伊住公一朗編『淡交 九四九号』淡交社、二〇二二年八月)。
- (61) 宮武慶之「江戸の道具商・本惣…了我、了芸の活動に注目して」(国際日本文化研究センター『日本研究』二〇一九年一〇月)。
- (62) 前掲注(60)、三七頁。

- (63) 拙稿「『定家卿筆道』 伝本考 付校本」(総合研究大学院大学『総研大文化科学研究 第一九号』二〇二三年三月) 一一・一二頁。
- (64) 本稿では取り上げないが、公家における同様な篆隸体・定家様の享受も推測される。
- (65) ただし、縮写ゆえ部分的に合致しない字形も見られる。
- (66) 大阪市立美術館・五島美術館編『書の国宝 墨蹟』(読売新聞大阪本社、二〇〇六年) 一三三・一三三頁。
- (67) 出光美術館『茶の湯の床飾り―茶席をかざる書画』(出光美術館、二〇二三年) 八八頁。
- (68) 前掲注(67)、一〇〇頁。
- (69) 『定家卿筆道』については、拙稿「『定家卿筆道』 伝本考 付校本」(総合研究大学院大学『総研大文化科学研究 第一九号』二〇二三年三月)、『定家卿筆道』の著述内容とその意義」(総合研究大学院大学『総研大文化科学研究 第二〇号』二〇二四年三月)を参照されたい。

二〇二四年八月三十一日 受付
二〇二四年二月六日 採択決定

『大正名器鑑』における箱書の調査結果

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載,無				
茶入之部 第一編												
		漢作唐物肩衝	初花肩衝	○				初花	記載なし	挽家	彫銘金粉	
				○				初花	記載なし	内箱	金粉銘	
			新田肩衝				○	につた	筆者不知	挽家	金粉	
			北野肩衝					—				
			油屋肩衝					—				利休筆添掛物（行書体）画像有。
			玉堂肩衝			○		玉堂	筆者未詳	挽家	銀粉書付	
			遅櫻肩衝					—				
			久我肩衝			○		御來入	書付筆者不詳	内箱		
			筑紫肩衝				○	筑紫 肩衝	片桐如州(石州)	内箱		
			植村肩衝			○		唐物 肩衝	狩野探幽	内箱		
			不動肩衝				○	不動肩衝	記載なし	挽家	張紙	
			宮王肩衝				○	宮王	記載なし	内箱		「書付板横目に認む」の記載有。
			味噌屋肩衝					—				
			薬師院肩衝	○				薬師院	記載なし	挽家	金粉	
			鍋屋肩衝					—				
			木目肩衝	○				木目 肩衝	遠州	内箱		
			大隈肩衝				○	大隈肩衝	記載なし	挽家	金粉字形	
			大坂肩衝					—				
			伊木肩衝					—				
			青木肩衝		○	○		青木 肩衝	記載なし	内箱		「青木」定家様、「肩衝」楷書体。
				○				青木	記載なし	外箱 (表)	金粉字形	
								東照宮 御物 後藤庄三郎 拝領 自後藤家贈来	記載なし	外箱 (裏)	金粉字形	
			星肩衝					—				
			宗無肩衝				○	宗無肩衝	記載なし	挽家	金粉字形	
			道阿彌肩衝				○	道阿弥	記載なし	挽家	金粉字形	
			勢高肩衝			○	○	勢高 肩衝	蘭笥(本田忠純)	内箱		「高」行書体、他は楷書体。
				○				勢高 古織所持 年正月三日拝領	本田宗範	中箱 (裏)		
			日野肩衝					—				
			伯耆肩衝					—				
			師匠坊肩衝		○			師匠坊	筆者不明	挽家	金粉字形	

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			松屋肩衝					○	一			
			松山肩衝	○					松山	小堀宗中	挽家 金粉字形	
				○					松山 肩衝	小堀宗中	内箱	
			繁雪肩衝					○	一			
			本願寺肩衝					○	一			
			佐助肩衝	○					佐助	記載なし	挽家	彫銘緑青入
			宗半肩衝			○			宗半	記載なし	挽家	凹彫金入
			朱衣肩衝			○			朱衣肩衝	記載なし	内箱	金粉字形
						○			朱衣肩衝	記載なし	不明	
									朱衣肩衝者 器而今・・・※	記載なし	外箱	金粉字形
			雲山肩衝	○					雲山	松浦註	挽家	金粉字形
			佐伯肩衝	○					佐伯	逸州	挽家	金粉字形
						○			佐伯肩衝	逸州	箱	
			安國寺肩衝						安國寺肩つき	記載なし	挽家	張紙
			松飾肩衝	○					松飾	記載なし	挽家	金粉字形
			竈口肩衝	○				○	一			
									山井肩衝	小堀權十郎	挽家	金粉字形
				○					竈口肩衝	小堀權十郎	中箱	黒漆書付
									あさくともよしやまたく む 人もあらし・・・※	小堀權十郎	内箱 (裏)	金蒔絵短冊形書付
			酒井肩衝	○					大肩衝	逸州	内箱	金粉字形
			平野肩衝			○			平野 肩衝	記載なし	内箱	金粉字形
			平手肩衝					○	一			「平野」楷書体、「肩衝」行書体。
			殘月肩衝			○			殘月	記載なし	挽家	金粉銘
			白雲丸肩衝					○	一			
			竈肩衝			○			コソ肩衝	伝足利義政	内挽家	金粉字形
						○			竈肩衝	伝相阿弥	外挽家	金粉字形
									朱四方盆 今渡り御物四角 主うす手	伝珠光	添盆箱	画像不明瞭のため書体不明。
			朝肩衝			○			ウツホ肩衝 御茶入	記載なし	内箱	徳川三友筆添小札 (行書体) 画像有。
			八雲肩衝	○					八雲	逸州	挽家 (蓋)	銀象嵌

			○			やくもたつ 出雲やへかき つまこめに・・・※	遠州	挽家 (桐)	銀象嵌	※和歌が記される。
		○				八雲	遠州	内箱	墨書付	
	蘆鹿肩衝				○	一				短冊 (行書体) 画像有。
	富士山肩衝	○				富士山	江月和尚	挽家 (蓋)	彫銘	
		○				壺中有天地 山改簪時容 礎下霏々雪・・・※	江月和尚	挽家 (桐)	詩彫付	※漢詩が記される。
		○				富士山	小堀遠州	内箱		書付場所は外箱の可能性有。
	常陸帯肩衝	○				常陸帯	文如上人	内箱		
				○		此來入者最初京極宰相高次 卿所持也・・・※	文如上人	外箱 (裏)		※由来が記される。
	竹中小肩衝		○			羽柴秀吉ヨリ 竹中重治 給之其後・・・※	記載なし	内箱 (裏)	張紙	※由来が記される。
	小肩衝	○				小肩衝	小堀権十郎	挽家	金粉字形	
		○				小肩衝	小堀権十郎	内箱	黒漆	
	かはづ肩衝		○			かはづ	遠州	内箱 (表)		
			○			新古今 おりにあへは これにもさすかに・・・※	遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
	漢作唐物茄子				○	一				
	北野茄子		○			北野茄子 御茶入之盆 唐 蒔絵柘榴	記載なし	添盆箱		
	富士茄子	○				富士 茄子	遠州	内箱		
				○		利休作	記載なし	茶杓箱		
	付藻茄子			○		付藻	記載なし	箱	金粉	添掛物 (行書体) 画像有。
	松本茄子			○		松本茄子	記載なし	箱	金粉字形	
			○			自東照大権現宮拝領 藤元 松本茄子藤巖	記載なし	内箱	金粉字形	
	宗悟茄子	○				宗悟 茄子	記載なし	挽家		
				○		茄子	記載なし	箱		
	種子茄子			○		茄子	島津齊宣	挽家	金粉字形	
				○		茄子御茶入	記載なし	内箱		
	曙茄子			○		曙	筆者未詳	挽家	凹彫	
		○				曙	記載なし	内箱		
	茜屋茄子			○		あかねやなすび 御茶入	記載なし	内箱	金粉字形	
	福原茄子			○		茄子	遠州	挽家	金粉字形	隸書体の筆法僅かに有。
				○		福原	遠州	内箱	金粉字形	隸書体の筆法僅かに有。
	七夕茄子			○		織女	記載なし	挽家	二重彫緑青入	

編	部	分類	通称	書体					書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無					
			京極茄子	○			○		七夕 茄子	遠州	内箱	金粉字形	
			澤標茄子				○		みをつくし	記載なし	挽家		
							○		遠州	内箱			
							○		紹鷗蓋 紹鷗所持 木口挽 茄子・・・※	坂本周斎	外箱 (裏)		※由来が記される。
			紹鷗茄子				○	○	—				
			豊後茄子				○	○	—				
			利休小茄子			○			豊後茄子 小茄子 小藁 利休	記載なし	内箱	凹彫	
			利休物相	○					木葉象茄子	小堀権十郎	挽家	金粉字形	
				○					利休物相 茄子	小堀権十郎	内箱		
				○					物相盆	記載なし	添盆箱		
第二編	逸作唐物文林 附文箱		珠光文琳				○		珠光文琳	記載なし	挽家	朱漆	珠光筆添掛物 (行書体) 画像有。
			酸漿文琳						ほうつき	記載なし	箱		画像不明瞭のため書体不明。
			本能寺文琳				○	○	—				
			玉垣文琳					○	—				
			岩藏文琳	○					上天文琳	小堀権十郎	挽家	金粉字形	蓋袋 (楷書体) 画像有。
			九鬼文琳	○					九鬼	記載なし	箱 (表)	銀粉	江月筆添掛物 (楷書体) 画像有。
						○			碾茶壺者九鬼文林者世之所・・・※	記載なし	箱 (裏)	朱漆	※由来が記される。
			横山文琳	○					文琳	宗甫 (遠州)	内箱	金粉字形	
			苔屋文琳			○			御茶入 苔屋文琳	記載なし	内箱		
			田村文琳	○					田村文琳 袋	遠州	袋箱		遠州筆添掛物 (行書体) ・船越永景筆添掛物 (行書体) 画像有。
				○					漢文琳 田村	遠州	内箱		
						○	○		くしやく 堆朱 盆	遠州	添盆箱		「くしやく」のみ行書体。「堆朱盆」は隸書体の筆法僅かに有。
			宇治文琳					○	—				藤林助顔添書付 (行書体) 画像有。
			平野文琳	○					平野	遠州	挽家		
					○				平野文琳	遠州	内箱		
			大文字屋文琳	○					文琳	記載なし	挽家	金粉書付	
				○					大文字屋 文琳	不昧	外箱		
			白玉文琳				○		白玉	記載なし	内箱		
							○		白玉 文琳	記載なし	中箱	金粉字形	

[illegible]

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項	
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体						記載無
			青山丸壺					青山丸壺		記載なし	内箱	金粉字形	
			石河丸壺			○		—		記載なし	内箱	金粉字形	
			時鳥丸壺				○	時鳥		記載なし	挽家	金粉字形	御水尾院筆添掛物（行書体）画像有。
							○	後水尾御発句添す	ほとゝき	記載なし	内箱		
			唐丸壺				○	唐丸壺		記載なし	箱	金粉字形	
			利休丸壺				○	—					
			龍光院丸壺				○	丸つほ		筆者未詳	箱		「第三号」「大徳寺中 龍光院」の貼紙（楷書体）有。
		漢作唐物大海	打墨大海				○	—					
			八島大海	○				八島	遠州	内箱			
				○				四方竹 朱盆	小堀宗慶	添盆箱			
			山櫻大海	○				唐 大海 山櫻	記載なし	箱			
			八重櫻大海		○			八重櫻	遠州	内箱（裏）	金地色紙の中張紙		
			唐大海	○				唐大海	小堀遠州	箱			
			唐大海	○				唐大海	遠州	箱			
		漢作唐物鶴頭及鶴子	養老鶴首				○	養老鶴首茶入	記載なし	内箱（表）			
				○				唐鶴首 養老	記載なし	内箱（裏）			
			利休鶴首				○	—					
			本願寺鶴首			○		鶴首	記載なし	挽家	象牙象嵌		
			龍光院鶴首			○		唐物鶴頭 茶入	江雪和尚	箱			
			漢鶴	○				玉葛	遠州	内箱（表）			
					○			みせはやな 露のゆかりの玉かつら・・・※	遠州	内箱（表）			※和歌が記される。
			鶴子	○				鶴子	記載なし	挽家（蓋）	金粉字形		
							○	めつらしく今日立初る鶴の子は・・・※	記載なし	挽家（胴）	金粉字形		※和歌が記される。故ち書きで楷書体に近い。
			漱芳	○		○	○	溶霜 漱芳 明朱之庵（印）	朱之庵（朱舜水）	挽家	金粉字形		「溶霜」隸書体、「漱芳」楷書体、「明朱之庵」行書体。
				○				漱芳	鼎山公（徳川斉脩）	内箱			主舜水筆添巻物（楷・行書体）・東阜心越筆添巻物（隸・行書体）画像有。
		漢作唐物雜	西屋柿				○	紹鸞所持 柿茶入 宗佐	千随流斎	挽家（表）			

				○			紹鸚所持 柿茶入 小鳥宗活	千随流斎	挽家 (裏)		
				○			柿 茶入	随流斎	内箱 (表)		
					○		紹鸚所持 柿茶入 随流書付 不及斎 (花押)	不及斎	内箱 (裏)		
			○				耳付	遠州	挽家	金粉字形	
			○				唐 耳付	宗甫 (遠州)	挽家	金粉字形	
				○			絃つき	遠州	箱		
					○		御茶入 釣付	記載なし	外箱	貼紙	
				○			唐物 柑子	伝前田利常	内箱		外箱・惣箱の可能性有。
							壺中	松花堂	挽家	二重彫	遠州筆添巻物 (行書体) 画像有。
			○				壺中	松花堂	内箱		
			○				松花堂へ 宗甫公文七月三日	茶屋宗古	添巻物箱		「松花堂」以外は画像不明瞭のため書体不明。
					○		利休 尻くら	細川三斎 (忠興)	中箱		
						○	一				袋付紙 (行書体) 画像有。
							唐 搦茶	遠州	内箱		
						○	一				
							瓶子	宗甫 (遠州)	箱		
			○				皆口	小堀宗甫 (遠州)	挽家 (蓋)	凹彫	
					○		壺中天池別有日月 宗月・・・※	玉室・沢庵・江月	挽家 (胴)	凹彫	※三者の漢詩が記される。
			○				皆口	記載なし	内箱	張紙	
			○				鯨鱗	宗甫 (遠州)	挽家	額彫縁青入	
							唐 鯨鱗	江月または遠州	箱		「唐」は画像不明瞭のため書体不明。「江月」といひ又遠州ともいふ」記載有。
				○			餓鬼腹	記載なし	内箱		「書付板横目に認む」の記載有。「三箱百貳拾貳号」等二枚貼紙 (楷書体) 有。
			○				水滴 唐物	伝宗甫 (遠州)	内箱		「傳宗甫といへど大膽なるべし」の記載有。書付場所は外箱の可能性有。
	鳥物	胸高	○				胸高	小堀宗慶	内箱	金粉字形	
		鳥物耳付	○				鳴耳付	記載なし	内箱		
		靈龜		○			靈龜	記載なし	箱 (蓋)		茶入底「靈龜」 (楷書体) 画像有。
					○		玩弄有恨 寧泥塗生 被世人識・・・※	江月和尚	箱 (胴)		※漢詩が記される。

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
		追加 唐物肩 衛	堪忍肩衛				○		堪忍	記載なし	箱	
第三編	古瀬戸之部	肩衛	鎗の鞘	○					鎗の鞘	小堀遠州	挽家	金粉銘 書付者「鱈鳳龜龍」には筆者不知」 の記載有。
			生駒肩衛					○	—			
			平野肩衛	○					平野	小堀遠州	挽家	金粉字形
				○					平野	小堀遠州	箱	金粉字形
			松前肩衛			○			松前	記載なし	挽家	金粉字形
			山の井肩衛						山の井 瀬戸	細川三斎(忠興)	内箱	
			長谷川肩衛	○					長谷川	茶屋宗古	挽家	金粉字形
				○					古瀬戸 肩衛	茶屋宗古	内箱	金粉字形
			大島肩衛	○					大島肩衛	遠州	内箱	
			徳永肩衛				○		大瀬戸木形	記載なし	木形箱	「乾」の貼紙(楷書体)有。小堀 宗中添書付(行書体)画像有。
			成高肩衛			○			成高 肩衛 瀬戸	記載なし	箱	墨書付
			茶屋肩衛	○					茶屋 瀬戸	筆者未詳	挽家	凹彫
						○			茶屋 肩衛	筆者未詳	内箱	書付者「或は云ふ機砂院利常公」 の記載有。
			本阿彌肩衛					○	—			
			出雲肩衛	○					出雲肩衛	記載なし	挽家	彫銘緑青入
						○			出雲	細川宣紀	外箱	
			横田肩衛				○		横田肩衛	記載なし	挽家	金粉字形
			平手肩衛			○			仁	記載なし	添盆(裏)	朱
			八重櫻肩衛				○		八重桜	細川玄旨(幽斎)	挽家	朱漆書付
							○		や重さく羅	寂如上人	内箱	
			臨月				○		臨月	細川幽斎	挽家	金粉字形
			神谷肩衛				○		神谷肩衛	筆者未詳	外箱	張紙
			村雲肩衛			○			瀬戸	記載なし	挽家	金粉字形
						○			セト	記載なし	内箱	銀粉字形
			圓乗坊肩衛					○	—			
			山内肩衛	○					山内	記載なし	挽家	
			山内肩衛					○	—			
			在中庵	○					在中庵	遠州	蓋箱	

編	部	分類	通称	書体				書付文字		書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体						
			筒井肩衝				○		筒井順慶所持 筒井肩衝	記載なし	箱	金粉字形	
			加藤小肩衝					○	一				
			浅野肩衝	○					浅野	記載なし	扱家	凹彫緑青入	遠州筆添掛物（定家様）画像有。
						○			浅野	記載なし	内箱	書付張紙	
			小肩衝		○				せとのかたつき	遠州	内箱		画像一部不明瞭。
			白肩衝			○			白肩衝	記載なし	箱	書付張紙	
			金森肩衝				○		瀬戸かたつき	金森宗和	箱（胴）		
			奈良肩衝				○		奈良かたつき ふた 袋 三 宗関	片桐石州	袋内箱		
							○		奈良かたつき	記載なし	外箱		
									宗関居士所持奈良肩衝茶人・・・※	杉原弥右衛門	総箱（裏）	金粉字形	※由来が記される。
	文琳		霜夜文琳	○					霜夜 文琳	宗甫（遠州）	箱		
			山里文琳			○			山里	遠州	箱		
					○				風庵尊老 宗甫	宗甫（遠州）	添付杓筒		
			藻鹽文琳				○		もしほ	小堀遠州	扱家（胴）	金粉字形	
				○					古瀬戸 文琳	小堀遠州	内箱		
	丸壺		相坂丸壺	○					相坂	遠州	扱家	額彫	江戸筆添巻物（楷書体）・江雪筆添巻物（楷書体）画像有。
				○					相坂	遠州	内箱		
				○					相坂	遠州	蓋箱		
	尻彫		伊豫籬	○					伊豫籬	遠州	内箱		小堀権十郎筆添掛物（定家様）画像有。
	柿		瀬戸柿	○					瀬戸柿	遠州或いは宗慶	箱		「書付遠州或は云ふ宗慶」記載有。
	胴高		古瀬戸胴高					○	一				
	耳付		古瀬戸耳付	○					耳付 古瀬戸 大茶入	小堀大膳（宗慶）	内箱		
	芋子		勢至	○					勢至 瀬戸	遠州	内箱		外箱の可能性有。遠州筆添掛物（行書体）画像有。
			山櫻	○					山櫻	記載なし	扱家	金粉字形	
				○					芋子	遠州	箱		
			雨宿	○					雨宿	遠州	内箱		
			黄顔	○	○				瀬戸 貴なたれ	小堀宗慶	箱		「なたれ」のみ定家様。
	大海		敷島大海	○					瀬戸 大海 敷島	遠州	箱		
			大島大海	○					大島	松平不昧	内箱		外箱の可能性有。
			八重櫻大海	○					八重櫻 大海	宗甫（遠州）	箱		

		置紋大海	○				置紋	遠州	内箱		
		節季大海	○				節季	小堀遠州	内箱		
		谷大海	○				瀬戸 火口 大海	遠州	内箱		
		金森大海	○				金森 大海	小堀遠州	内箱		
	春慶之部	朝日	○		○		淀 肩衝	松平和泉守	内箱 (表)		「淀」のみ楷書体。
				○			うちわたす 遠方人も 春とてや・・・※	松平和泉守	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		池島肩衝		○			池島肩衝	記載なし	挽家	金粉字形	
				○			池島肩衝	記載なし	箱		画像不明瞭であるが、鎌書体の筆法が僅かに見られる。
		木津屋	○				木津屋	小堀遠州	箱		
		中路		○			朝日	記載なし	挽家	二重彫緑青入	
			○				中路	遠州	箱 (表)	金粉字形	
					○		いそのかみ布留の 中道なかなかに・・・※	中院通茂	箱 (裏)	白色紙	※和歌が記される。
		文琳	○				文琳	遠州	挽家	二重彫	
			○				春慶 文琳	遠州	内箱		
		瓢箪	○				春慶 瓢箪	宗甫 (遠州)	箱		
		瑩	○				瑩	小堀遠州	挽家	金粉字形	遠州筆添掛物 (行書体) 画像有。
				○			ほたる	小堀遠州	内箱	金粉字形	
		春慶瓢箪	○				瓢箪	遠州	挽家	額彫	
							春慶 瓢箪	遠州	内箱	金粉字形	
		春慶口瓢箪	○			○	—				
							口瓢箪 袋	小堀遠州	袋箱		
			○				春慶 瓢箪	小堀遠州	内箱		
		瀬戸小大海	○				瀬戸 小大海	遠州	箱		
		山櫻		○			山櫻	記載なし	箱		
		春慶柿	○				春慶	宗甫 (遠州)	箱		
		春慶陰描茶	○				春慶 描茶	筆者不詳	内箱		
		春慶玄	○				春慶手 玄	遠州	内箱		
		瑩	○				瑩	遠州	挽家	金粉字形	
			○				瑩	遠州	箱		
		春慶十王口	○				春慶	記載なし	箱	字形青貝	
		鼠春慶	○				鼠	遠州	挽家	金粉字形	
第四編 (上編)	真中古之部	野田手	○				面影	小堀権十郎	挽家 (蓋)	金粉字形	

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
					○			人は尹さ思ひ やすらむ 玉かつら・・・※	小堀権十郎	挽家 (桐)	金粉字形	※和歌が記される。
				○				野田之 面影	小堀遠州	内箱		
			猿岩	○				猿岩	記載なし	内箱 (蓋)	凹彫緑青入	遠州筆添短冊 (行書体) 画像有。
							○	道閑老まいる 小遠江守	記載なし	内箱 (桐)	凹彫	
			宮城野	○				宮城野	小堀遠州	内箱 (蓋)	金粉	
					○			様々に心そとまる宮城野 の・・・※	小堀遠州	内箱 (桐)	金粉	※和歌が記される。
			月迫	○				月迫	遠州	箱		
			河菜草		○			かわな草	小堀権十郎	内箱 (表)		
								むはたまの 夢になにかは なくさまむ・・・※	小堀権十郎	内箱 (裏)		※和歌が記される。
				○				河菜草	松平不昧	外箱		
			山櫻		○			三國	茶屋宗古	挽家	金粉字形	
				○				山櫻	小堀遠州	内箱		
		橋姫手	橋姫	○				橋姫	記載なし	箱		
			恐	○				恐	遠州	挽家	金粉	
				○				恐	小堀遠州	箱		
			布引				○	一				
		思河手	思河	○				思河	小堀遠州	挽家	金粉字形	中院通茂筆添掛物 (行書体) 画像有。
				○				思河 款冬のはなに る、おもひ河・・・※	小堀遠州	内箱 (表)	墨書	
					○			せか		内箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
			岩浪			○		岩浪	記載なし	挽家	銀粉字形	
					○			岩浪	記載なし	箱 (表)		
								きふね川 玉しくせゝの 岩浪に・・・※	朽木澤翁	箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
		大瓶手	常夏	○				常夏	小堀十左衛門	挽家	銀粉字形	
				○				常夏	小堀十左衛門	内箱 (表)	墨書	
								おしむへきとなりも ぬ庭の面や・・・※	小堀十左衛門	内箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
					○			おしむへきとなりも ぬ庭の面や・・・※	松平伊賀守	外箱 (桐)	朱漆書付	※和歌が記される。
			鈴鹿山		○			えそすきぬ是や す、かの せきならむ・・・※	筆者未詳	挽家 (桐)	金粉	※和歌が記される。

			○				鈴鹿山	筆者未詳	内箱	金粉・銀粉	「鈴・山」金粉、「鹿」銀粉。
		飯道寺	○				飯道寺	小堀遠州	挽家		
			○				瀬戸 肩衝	小堀仁右衛門	箱		
	大覺寺手	泡沫		○			泡沫	无上寛院	内箱		
				○			大覺寺本家茶入 銘泡沫 宗甫事跡之啓・・・※	无上寛院	外箱		※由来が記される。
		比丘貞		○			ヒクサタ	小堀遠州	挽家	金粉	隸書体と定家様の筆法が僅かに見られる。
		初雁	○				初雁	小堀大膳政之 (宗慶)	挽家		
			○				初雁	小堀権十郎	箱		
		玉村	○				玉村	小堀政房(宗瑞)	内箱(表)		
				○			うつろはて 庭おもしろき 初雪に・・・※	小堀政房(宗瑞)	内箱(裏)		※和歌が記される。
				○			玉村	小堀宗中	外箱(表)		
				○			たまむらの銘並に 引きう た遠州守政房・・・※	小堀宗中	外箱(裏)		※由来が記される。
	面取手	面取	○				面取	小堀遠州	箱		袋箱の可能性有。
		吸江	○				吸江	小堀遠州	内箱		
		佐久間面取				○	—				
		染色	○				面取 染色	小堀遠州	内箱		
		轉合庵	○				轉合庵 於大名	小堀遠州	箱		
			○				轉合庵 蓋式 袋	記載なし	総箱		
			○				轉合庵	小堀遠州	茶室額		書付者の記載はないが、箱書より判断。
		面取引貯	○				面取 曳貯	小堀遠州	内箱		
	小川手	小川	○				小川	小堀遠州	挽家	金粉字形	
			○				小川	小堀遠州	内箱	金粉字形	
		清水	○				清水	小堀遠州	内箱	銀粉銘	
		故郷				○	ふる郷	小堀政房(宗瑞)	挽家		
						○	ふる郷	小堀政房(宗瑞)	内箱		
		初風		○			初風	小堀遠州	内箱		
	藤四郎	藤四郎肩衝			○		肩衝	千利休	挽家		
							藤四郎 肩衝	三代劍翁紹智	箱(表)		画像不明瞭のため書体不明。
						○	利休付属也子孫永保之 劍 翁	三代劍翁紹智	箱(裏)		
		藤四郎肩衝			○		藤四郎 茶入	記載なし	箱		

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			木の本		○			木の本	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉銘	
					○			花の春 紅葉の秋に あらぬまも・・・※	松平武元	内箱 (裏)		※和歌が記される。
			薄紅葉		○			うす紅葉	小堀権十郎	挽家	銀粉字形	
					○			うす紅葉	小堀権十郎	箱		
			柳藤四郎		○			清水	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				清水 肩衝	本多宗範	内箱		
			青柳	○				青柳	小堀遠州	挽家	凹彫緑青入	
				○				藤四郎 青柳	小堀遠州	箱		
			春山蛙聲	○				蛙聲	小堀遠州	挽家	凹彫緑青入	
				○				春山	小堀遠州	箱	金粉字形	
		糸目藤四郎	糸目藤四郎	○				糸目 大海	筆者未詳	内箱		
		虫咀藤四郎	虫咀藤四郎	○				虫咀藤四郎	記載なし	挽家	金粉字形	
	藤四郎 春慶之部	雪柳手	雪柳				○	—				
		塞手	塞	○				塞	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
			常如院	○				常如院	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				常如院	小堀遠州	箱		
			下枝	○				下枝	小堀十左衛門	内箱 (表)	墨書付	「枝」は定家様の筆法。
					○			續拾遺集 藤花年久遠 覚親王 すみよしの・・・※	小堀十左衛門	内箱 (裏)	金地色紙	※和歌が記される。
		メ切	メ切	○				メ切	小堀遠州	内箱	金粉銘	
		瓢箪	閩瓢箪	○				閩	松平不昧	外箱		松平不昧筆添書付 (定家様) 画像有。
			貯月	○				貯月	小堀遠州	挽家	彫銘	
				○				瓢箪 春慶	小堀遠州	内箱		
			後春慶之部	○				漣酌	小堀遠州	内箱		
		正信	漣津	○				正信	記載なし	挽家	二重彫	
				○				漣津	阿部豊後守	箱 (表)		「書付阿部豊後守か」の記載有。
					○			山ふかみ漣津 はや川をとすみで・・・※	阿部豊後守	箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
第四編 (下編)	金華山之部	飛鳥川手	飛鳥川	○			○	飛鳥川	宗甫 (遠州)	挽家 (蓋)	彫緑青入	酒井空印筆添掛物 (行書体) 画像有。
						○	○	きのおといひけふを・・・、 流急不留・・・※	記載なし	挽家 (胴)	彫緑青入	※遠州和歌・行書体、江月漢詩・楷書体が記される。

			鷹羽屋	○				鷹羽	松平不昧	外箱		
			木枯		○	○		飛鳥川 手	記載なし	内箱 (表)		「飛」のみ行書体。
				○				あすか川 瀬、になみよ る・・・※	小堀備中守	内箱 (裏)	小色紙	※和歌が記される。
			三笠山	○				三笠山	舟越伊予守	内箱		舟越伊予守筆添掛物 (行書体) 画像有。
			疵肩衝	○				疵肩衝	伝神尾大和守	挽家	凹彫緑青入	「神尾大和守自刻と言傳」の記載有。
				○				疵肩衝	小堀遠州	内箱		
			玉柏手	○				玉柏	宗甫 (遠州)	挽家 (胴)		小堀宗中筆添書付 (定家様) 画像有。
			常盤	○				常盤	記載なし	挽家	金粉字形	後西天皇筆添掛物 (行書体) 画像有。
				○				常盤	小堀遠州	箱 (表)		
				○				常盤なる 松のみとりも 春くれば・・・※	小堀遠州	箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
			村雨	○				村雨	小堀十左衛門	内箱		外箱の可能性有。
			玉藻	○				玉藻	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				たまも	小堀遠州	箱		
			増鏡	○				増鏡	小堀遠州	内箱 (表)		
				○				ます鏡 手に取持て 朝 な・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
			一本		○			一本	小堀宗慶	挽家 (蓋)	金粉字形	
				○				いかなればこの ひともと に時雨・・・※	小堀宗慶	挽家 (胴)	金粉字形	※和歌が記される。
						○		ひと本	小堀宗慶	内箱	金粉字形	
			笹	○				笹	小堀権十郎	箱		
			谷陰	○				谷陰	小堀権十郎	挽家	金銀粉字形	「谷」金粉、「陰」銀粉。
				○				谷陰	小堀権十郎	内箱		添書付 (定家様) 画像有。
						○		中古名物 谷陰 玉柏手 小堀蓬雪之 書付 竹翠 (花押)	籾内竹翠	中箱 (表)	金粉字形	
						○			籾内竹翠	中箱 (裏)	金粉字形	
			瀧浪手	○				瀧浪	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
			青江	○				青江	阿部豊後守正武	箱	墨書付	
			面影	○				面影	小堀遠州	内箱		
			志賀	○	○			麓々水雲残・・・、見せは やな志賀の・・・※	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉・二重彫	※漢詩は隸書体・金粉、和歌は定 家様・二重彫。
					○			志賀	小堀遠州	内箱	銀粉銘	

編	部	分類	通称	書体					書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無					
			白浪	○					白波	小堀十左衛門	挽家	金粉字形	
					○				興津風みきはによせぬ白波や・・・※	小堀十左衛門	箱 (桐)	朱漆書付	※和歌が記される。
			村上肩衝			○			村上義清所持 元和五年十月従・・・※	記載なし	箱 (裏)	張紙	※由来が記される。
			濱松						濱松	筆者未詳	箱		画像不明瞭のため書体不明。
		生海鼠手	三輪山	○					三輪	小堀遠州	挽家	凹彫緑青入	
				○					瀬戸 肩衝 三輪	小堀遠州	内箱 (表)		「書付小堀遠州 (或云小堀備中守宗慶)」と記載有。
					○				三輪の山いかに 待みむとしふとも・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
			木本	○					木本	小堀遠州	挽家	金粉銘	
				○					木本	小堀遠州	内箱 (表)		
					○				山さくら花の下かせ ふきにけりこのもと・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
			岩藤	○					岩藤	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○					岩藤	小堀遠州	箱		
			深美	○					深美	筆者未詳	挽家	金粉字形	
			桑山	○					桑山	記載なし	挽家	金粉字形	
						○			海参手 御茶入 一 桑山	記載なし	外箱		
			薬師	○					薬師	記載なし	挽家	金粉字形	蓋袋 (楷書体) 画像有。
				○					薬師	小堀遠州	内箱		
			妹背山	○					妹背山	小堀宗甫 (遠州)	挽家 (桐)	金粉凹彫	
					○				浅緑かすみわたれる たへまより見れとも・・・※	小堀権十郎	外箱 (桐)	朱漆書付	※和歌が記される。
			浪花	○					浪花	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○					浪花	小堀遠州	箱	金粉・銀粉	「浪」金粉、「花」銀粉。
		大津手	大津	○					大津	小堀遠州	内箱	金粉・銀粉	「大」銀粉、「津」金粉。
			打出	○					打出	小堀遠州	内箱	金粉字形	
			白露	○					白露	小堀十左衛門	挽家	銀粉字形	松平不昧筆添書付 (行書体) 画像有。
				○					白露	小堀十左衛門	箱 (表)		
					○				よそへても見るへかりけりしら露・・・※	小堀十左衛門	箱 (裏)		※和歌が記される。
			松島	○					松島	阿部豊後守	箱		※「(備考) 古今茶湯集には箱書付松平乗邑とあり」の記載有。

	廣澤手	廣澤	○				廣澤	小堀遠州	挽家 (洞)	金粉字形	
			○				廣澤	小堀遠州	箱	金粉字形	
		春雨	○				春雨	小堀遠州	内箱 (表)	金粉書付	
				○			ひろさはの 池のつゝみの 柳かけ・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)	金粉書付	※和歌が記される。
		呉竹	○				呉竹	松平備前守	挽家 (洞)	金粉銘	
			○				呉竹	松平備前守	内箱 (表)		
				○			風ならてとふ人も なき友 なれや・・・※	松平備前守	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		松陰	○				松陰	小堀遠州	箱		
	眞如堂手	眞如堂	○				眞如堂 袋	小堀十左衛門	袋箱		
			○				眞如堂	小堀遠州	挽家	金粉字形	
			○				眞如堂	小堀十左衛門	内箱		
		神樂岡	○				神樂岡	阿部豊後守	内箱	金粉字形	
		響の灘		○			ひゝきのなた	筆者未詳	内箱	墨書付	
		鏡河	○				鏡河	小堀遠州	内箱 (表)	金粉銀粉	「鏡」金粉、「河」銀粉。
				○			月迹樓 顯仲 かゝみ河か けみる・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
		藤重	○				藤重	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
		鏡山		○			鏡山	小堀遠州	箱 (表)	金粉字形	遠州江月画筆添掛物 (定家様・楷 書体) 画像有。
				○			立掃又こそ 見つれ鏡山 つれなき・・・※	小堀遠州	箱 (裏)	金粉字形	※和歌が記される。
		龍田	○				龍田	記載なし	挽家	額彫金粉字形	
		玉柳	○				玉柳	記載なし	挽家	金粉字形	
			○				玉柳	小堀遠州	箱		
	盤余野手	盤余野	○				盤余野	小堀遠州	内箱 (表)	金粉・銀粉	「盤余」金粉、「野」銀粉。
				○			はきか花たれ にか見せむ うつらなく・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
	二見手	二見	○				弋見	小堀遠州	挽家 (洞)	二重彫緑青入	
			○				弋見	小堀遠州	箱		
		卽色		○			卽色	小堀遠州	挽家 (表)	金粉字形	
				○			むなしきか色なき いろは 誰かみむよし・・・※	小堀遠州	挽家 (裏)	金粉字形	※和歌が記される。
			○				卽色	江月宗玩	内箱 (蓋)	朱書付	
					○		色卽是空卽是色	江月宗玩	内箱 (洞)	朱書付	
	藤浪手	藤浪	○				藤波	小堀遠州	内箱 (表)	金粉・銀粉	「藤」金粉、「浪」銀粉。

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
					○			延喜御製 かくてこそ まくほしけれ・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)	小色紙	※和歌が記される。
		天目手	小茄子	○				小茄子	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉銘	
				○				瀬戸 天目手	小堀遠州	内箱		
第五編 (上編)	破風簾之部	翁手	翁	○				翁	小堀遠州	挽家	凹彫	
				○				翁	小堀遠州	箱		
								ますかゝみ そこなる けにむりひゐて・・・※	小堀遠州	挽家 (胴)	銀粉	※和歌が記される。
					○			増鏡	小堀遠州	内箱		
								九	小堀遠州	挽家	金粉字形	
		几手	九	○				蓬生	縣宗知	内箱 (表)	墨書	外箱の可能性有。
			蓬生	○				たつねでも 我こそ め・・・※	縣宗知	内箱 (裏)	小色紙	※和歌が記される。
					○			撰肩	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉	
			玉津島	○				玉津島	小堀権十郎	挽家	金粉字形	
				○				玉津島	小堀権十郎	内箱 (表)		
					○			すきかてに みれともあか ぬ 玉津島・・・※	小堀権十郎	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		口廣手	天筒山	○				天筒山 口廣	小堀遠州	内箱	金粉銘	
			豊後口廣	○				口廣	阿部豊後守正武	内箱	朱漆	
			紹高	○				紹高	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉字形	
				○				紹高	小堀遠州	内箱		
			稻葉口廣	○				口廣	小堀備中守宗慶	挽家	金粉字形	
				○				口廣 肩衝	小堀備中守宗慶	内箱		
			口廣 黄葉	○				口廣	記載なし	挽家	凹彫金粉入	
				○				口廣	記載なし	内箱		
		漉紙手	潮路庵	○				潮路庵	中島潮路庵宗古	挽家 (蓋)	金粉字形	
					○			潮路選塵街 結庵掩柴門	中島潮路庵宗古	挽家 (胴)	金粉字形	
				○				潮路庵	中島宗古	内箱	金粉銘	
			寛	○				寛	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				寛	小堀遠州	箱 (表)		
					○			住は又すまれ こそせめ山 里の・・・※	小堀遠州	箱 (裏)	色紙	※和歌が記される。
			山櫻		○			山櫻	小堀遠州	挽家	金粉字形	

			○				山櫻	小堀遠州	内箱		
		蘆垣	○				芦垣	阿部豊後守忠秋	挽家		
			○				芦垣	阿部豊後守忠秋	内箱	金粉字形	
		藻隠		○			もしほ	縣宗知	内箱 (表)		
				○			もしほ たれつ、佐と こたへよ	縣宗知	内箱 (裏)		
		垣根		○			かきね	阿部豊後守	内箱 (表)		
				○			さきてこそ 人にとはるれ 夕顔の・・・※	阿部豊後守	内箱 (裏)	※和歌が記される。	
		藤袴	○				藤袴	筆者未詳	箱 (表)	墨書付	
					○		おなし野の露に やつる、 藤はかま・・・※	筆者未詳	箱 (裏)	墨書付	※和歌が記される。
	皆の川手	みなのか		○			みなのか	小堀遠州	箱	金粉字形	遠州筆添掛物 (定家様、蓋袋 (楷・ 行書体) 画像有。
		忘水	○				忘水	阿部豊後守正武	内箱 (表)		
				○			人もみなむすふ 身なれと わすれ・・・※	阿部豊後守正武	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		玉霞			○		みなのか手 玉霞	筆者未詳	内箱		
	音羽手	音羽山	○				音羽山	小堀遠州	挽家	金粉字形	遠州筆添掛物 (隸書体・定家様) 画像有。
		兒手柏	○				兒手柏	久保權太夫利世	挽家	金粉字形	松永貞徳筆添掛物 (行書体) 画像 有。
	正木手	正木	○				正木	小堀遠州	内箱		
		大正木	○				大正木	小堀遠州	挽家	額彫緑青入	
			○				大正木	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
	橋立手	橋立	○				橋立	小堀遠州	挽家	凹彫緑青入	
							橋立	筆者不明	内箱		画像不明瞭のため書体不明。
	玉川手	玉川	○				玉川	小堀十左衛門	内箱	金粉・銀粉字形	「玉」金粉、「川」銀粉。遠州筆 添掛物 (隸書体・定家様) 画像有。
	米市手	米市	○				米一	小堀遠州	箱	金粉字形	
		布引	○				布引	小堀宗慶	内箱 (表)		
				○			音にのみ き、しはこの 数ならて・・・※	小堀宗慶	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		戸灘瀬	○				戸灘瀬	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
		箕面	○				箕面	小堀遠州	内箱		
		時雨	○				時雨	小堀備中守政之	挽家	凹彫緑青入	
			○				時雨	小堀備中守政之	箱 (表)	墨書付	

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
					○			更る夜のねさめの窓に をとつる、...※	小堀備中守政之	箱(裏)	絹色紙	※和歌が記される。
	市場手	忘水		○				忘水	小堀遠州	内箱		
		宮島		○				宮島	小堀遠州	挽家	金粉字形	
		卯花		○				卯花	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				瀬戸 肩付	小堀遠州	箱(表)		
					○			うの花のさかりならすは 山麓の...※	小堀遠州	箱(裏)		※和歌が記される。
		月草			○			月草	小堀権十郎	挽家	金粉字形	
	後窯之部	利休窯	地藏	○				地藏	小堀遠州	挽家	金粉字形	
				○				地藏	小堀遠州	内箱		
		谷川		○				谷川	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
		因幡堂		○				因幡堂	小堀権十郎	内箱		
		鏡山				○		鏡山	伊達吉村	挽家	金粉字形	
				○				鏡山	松平不昧	内箱		
		育王山		○				育王山	小堀十左衛門	箱		
	織部窯	潔標			○			みをつくし	小堀遠州	挽家(蓋)	金粉	
					○			みをつくしこふるしるし にこ、まても...※	小堀遠州	挽家(胴)	金粉	※和歌が記される。
				○				潔標	小堀遠州	内箱		外箱の可能性有。
		喜撰				○		喜撰	古田織部	内箱	凹彫	
		不二		○	○			不二 織部焼	松平不昧	袋箱		
				○				不二	小堀遠州	内箱(蓋)		
					○			時しらぬ五月のころの色を みよ...※	小堀遠州	内箱(胴)		※和歌が記される。
		山本瓢箪			○			山もと	小堀遠州	挽家	金粉字形	
					○			山本	小堀遠州	箱	金粉字形	
								初祖	細川三斎	内箱		画像不明瞭なため書体不明。
	正意	初祖							小堀十左衛門	内箱		
		六祖		○				六祖 袋	記載なし	袋箱		
		面壁		○				面壁 九季坐久 面不見 人...※	江月和尚	挽家	凹彫緑青入	※漢詩が記される。
				○				面壁	小堀遠州	内箱		
				○				岡邊	小堀遠州	内箱(表)		

			○	○			松たてゐるをかへにむかふ・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。「松」のみ隸書体。
	千草			○			千草	松平不昧	挽家	金粉字形	
				○			千草	松平不昧	内箱		
	萬右衛門	田面	○		○		田つら茶入 袋二	記載なし	袋箱		「つら」のみ行書体。
				○			田つら	小堀遠州	挽家	金粉字形	遠州筆添掛物 (定家様) 画像有。
				○			田つら	小堀遠州	箱	金粉字形	
	鳥羽田		○				鳥羽田	小堀遠州	挽家 (胴)	金粉字形	松平不昧筆添掛物 (定家様) 画像有。
			○				鳥羽田	小堀遠州	内箱 (表)		
				○			友雀ひきゐて そりぬ山城の・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)		※和歌が記される。
	振鼓		○				振鼓	小堀遠州	挽家	銀粉銘	
			○				振鼓	小堀遠州	内箱		
	嵐山		○				嵐山	小堀遠州	内箱		
	新兵衛	辨舌	○				傳兮 袋 辨舌	土屋相州・松平左近将監 (乗邑)	袋箱	墨書付・朱書付	「傳兮 袋」土屋相州筆墨書付「辨舌」松平乗邑筆朱書付。
				○			傳兮 松平備州名・・・※	土屋相州・松平左近将監 (乗邑)	挽家 (胴)	緑青入・朱漆書付	※由来が記される。「傳兮」は土屋相州筆緑青入、他は松平乗邑筆朱漆書付。
	山雀		○				山雀	小堀十左衛門	挽家	銀粉字形	
			○				山雀	小堀十左衛門	内箱		
	空也		○				空也	小堀遠州	挽家	凹彫	茶器底の彫文字 (書体不明瞭) 画像有。
			○				空也	小堀遠州	内箱 (表)	墨書	
				○			世に無類は空也瓢箪 小堀遠江守政一・・・※	儉安斎	内箱 (裏)	張紙	※由来が記される。
			○				空也	記載なし	外箱	金粉字形	
	張果郎				○		茶入 銘張果郎	哀公 (徳川斉脩)	外箱		瓢箪の絵の中に茶入の文字記載。
	佐助		○				松平不昧		外箱		内箱の可能性有。
	老茄子		○				老茄子	小堀遠州	箱		「遠州筆古筆極札一枚添」の記載有。
	遠山		○				遠山	小堀権十郎	挽家	金粉字形	
			○				遠山	小堀権十郎	内箱 (表)		
				○			晴わたる 朝氣の 雲の下 毎に・・・※	小堀権十郎	内箱 (裏)		※和歌が記される。
	黄初平		○				新兵衛	船越伊予守宗舟 (永景)	挽家 (蓋)	金粉字形	

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
				○	○			黄初平 となつく 舟	船越伊予守宗舟 (永景)	挽家 (桐)	金粉字形	「黄初平」「舟」隸書体、「となつく」 定家様
						○		新兵衛 茶入	天祐和尚	内箱		
		宗伯	不聞猿				○	不聞猿	記載なし	箱		
		吉兵衛	小鹽	○				小塩	小堀権十郎	挽家 (蓋)	金粉字形	画像不明瞭な箱書他1点有。
		茂右衛門	吉野山		○			よし野山	小堀権十郎	挽家 (蓋)	凹彫	
					○			春はまつ花かと そ見る吉 野山・・・※	小堀権十郎	挽家 (桐)	凹彫	※和歌が記される。
				○				吉野山	小堀権十郎	内箱		
		源十郎	みなのか		○			みなのか	小堀権十郎	内箱		
					○			みなのか茶入 箱書付宗 甫・・・※	小堀政方(宗友)	中箱 (表)		※由来が記される。
					○			源十郎焼 みなのか	小堀政方(宗友)	中箱 (裏)		
		鳴海寮	餓鬼腹					一				画像不明瞭な箱書1点有。
第五編 (下編)	國曉之部	唐津	思河	○				思河	小堀遠州	内箱 (表)	朱書	
					○			おもひ川 まれなる中に なかるなり・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)	朱書	※和歌が記される。
				○				松山	小堀遠州	箱		
				○				祖母懷 弦	小堀遠州	内箱		
				○				名物 祖母懷弦茶入	小堀宗中	外箱		
								丸亀 祖母懷 瘤座	筆者不知	箱		画像不明瞭のため書体不明。茶器 底の彫文字 (書体不明瞭) 画像有。
								布袋 白地ノ袋 利休の時 の	記載なし	袋箱	墨書	春屋叟宗筆添掛物 (楷書体) 画像 有。
					○			布袋	千宗旦	内箱		
						○		布袋茶杓 利休	千利休	添茶杓筒		画像不明瞭のため書体不明。
												遠州江月面筆色紙 (定家様・楷書 体) 画像有。茶器底の彫文字 (書 体不明瞭) 画像有。
		鏡山		○			○	立歸又こそ見つれ鏡山・・・ ※	小堀遠州	内箱 (桐)		※和歌が記される。
								備前 さび助	松花堂昭乗	内箱 (表)		茶器底の彫文字 (書体不明瞭) 画 像有。
					○			古織部殿 御持料	松花堂昭乗	内箱 (裏)		
		唐琴			○			唐琴	記載なし	箱	銀粉字形	
		春雨		○				春雨 袋	松平不昧	袋箱		

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
				○				彫字形筆者 松花堂宗甫・・・・※	小堀宗中	外箱(裏)		※由来が記される。
			高取腰褌	○			○	高取 腰褌	小堀遠州	箱	金粉銀粉	「高取」隸書体・金粉、「腰褌」行書体・銀粉。
			玉柳		○			玉柳	小堀遠州	箱(表)	墨書付	
					○			たまやなき句ふともなき・・・・※	小堀遠州	箱(裏)	色紙書付	※和歌が記される。
		膳所	大江	○				大江	小堀宗甫(遠州)	内箱	金粉銘	
			白雲	○				白雲	小堀遠州	内箱(蓋)		
				○				白雲似帯 邊山腰・・・・※	小堀遠州	内箱(胴)		※漢詩が記される。
				○				白雲	小堀遠州	外箱	金粉字形	
	丹波	生野		○				生墊	小堀遠州	内箱	銀粉金粉	「生」銀粉、「墊」金粉。江月筆添掛物(行書体)画像有。
		さ、枕		○				佐、枕	記載なし	内箱	金粉字形	
		老坂		○				老坂	小堀遠州	内箱		
		柴の戸		○				柴戸	小堀遠州	内箱(表)		
					○			柴の戸にゆふ。日のかけのさしなから・・・・※	小堀遠州	内箱(裏)		※和歌が記される。
					○			しはのと	筆者不知	外箱	金粉字形	
		紅葉			○			紅葉	縣宗知	内箱(表)		
					○			風吹大江の山の紅葉はは・・・・※	縣宗知	内箱(裏)		※和歌が記される。
		山櫻		○				山櫻	小堀遠州	挾家(蓋)	金粉	
					○			さくときはもの、かすにはあらねども・・・・※	小堀遠州	挾家(胴)	銀粉	※和歌が記される。
	信樂						○	山櫻	記載なし	外箱		
	志戸呂	新次郎					○	新次郎 閑事庵	閑事庵宗信(坂本周齋)	箱		
	追加之部	口廣		○				口廣	松平不昧	内箱(蓋)	凹彫緑青入	
					○			此壺をなにとか人はどうと うみ・・・・※	松平不昧	内箱(胴)	墨書付	※和歌が記される。
		木津屋肩衝 漢作			○			木津屋	記載なし	挾家	金粉字形	
					○			木津屋 肩衝	記載なし	箱	金粉字形	「金粉字形」の記載はあるが、画像からは墨書付か。
					○		○	東山殿御物 しゆちやうむすひ	筆者未詳	外箱		「東山殿御物」楷書体、「しゆちやうむすひ」行書体。
		道蓮文琳 傳物			○			道蓮 文琳	筆者未詳	内箱		定家様の筆法が僅かに見られる。

			破被 古瀬戸文様				○			ヤフレスマ茶入	記載なし	内箱		備考に「書付は古来筆者不知とあれど長閑堂久保権太夫の筆なるべし」の旨記載有。
				○						破被	小堀十左衛門	外箱	金粉字形	遠州(定家様) 江月(楷書体) 画筆添掛物画像有。
			朝寝髪 古瀬戸肩袖	○						朝寝髪	小堀遠州	挽家	沈金顔彫	
				○						古瀬戸 朝寝髪	小堀遠州	箱(表)		
										あさ寝かみ 我をけつらしうつくしき・・・※	小堀遠州	箱(裏)	色紙	※和歌が記される。
				○						みもすそ川	小堀遠州	挽家(蓋)	金銀粉	「みも」金粉、「すそ川」銀粉。
			御裳覆川 大瀬手	○						立かへり又も みまくのほしきかな・・・※	小堀遠州	挽家(胴)	金粉字形	※和歌が記される。
				○						みもすそ川	小堀遠州	内箱		
										奈屋	記載なし	挽家	金粉字形	藤重藤玄筆添書付(行書体) 画像有。
			奈屋肩衝 備前部	○						夜鶴	近衛預楽院(家照)	箱		
			雲井 飛鳥川手	○						雲井	小堀備中守宗慶	挽家	額彫緑青入	遠州筆小短冊(行書体) 画像有。
				○						雲井	曲直瀬道三	内箱		
				○						七夕 御如意手	小堀備中守宗慶	箱		
茶碗之部										—				
第六編	天目之部	曜變	曜變					○		御茶器 曜變	筆者未詳	内箱	金粉字形	
										曜變天目	江月和尚	外箱		
										曜變天目 堺 油屋淨祐所持	記載なし	外箱	金粉字形	
										—				
										曜變	小堀遠州	内箱		
				○							小堀宗甫(遠州)	添盆箱		「巳」楷書体、「紅菊杭」隷書体。「古筆の趣礼あり」の記載有。
		油滴	油滴	○		○				巳 紅菊杭	小堀宗慶	箱		画像不明瞭のため書体一部不明。
				○						油滴天目				
										—				
										油滴天目 東山殿御物 味香堂	記載なし	内箱		
										—				
										建蓋	小堀遠州	内箱		
		建蓋	建蓋	○						—				
										建山天目 利休所持伝来 十世宗室(花押)	石翁宗室(不見斎)	箱(裏)		

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			星建蓋					○	—			
			星建蓋					○	—			
		灰被	灰被					○	—			
			夕陽			○	○		「天目 せきよう」	内箱	金粉字形	「天目」楷書体、「せきよう」行書体。備考に「利休時代と見える」の記載有。
			虹					○	—			
			灰被					○	—			
			埋火	○					埋火 辰	箱		
			秋葉天目				○		秋葉天目 はいかつき	内箱	凹彫金入	
					○				秋葉天目 はいかつき	外箱		
			灰被	○	○		○		はいかつき 天目 卯	内箱		「はいかつき」定家様、「天目」隸書体、「卯」行書体。
			灰被					○	—			相阿弥筆添掛物（行書体）画像有。
			灰蒙	○					灰蒙 天目	箱	銀粉字形	
			珠光天目					○	—			
		玳皮蓋	玳皮蓋					○	—			
			鮫皮蓋 鮫皮紋	○					鮫皮蓋	内箱	青貝細工	
			同	○					午 鮫皮蓋	箱		
			玳皮蓋 玉肌龍紋			○			玳皮蓋	箱	金粉字形	
			能皮蓋 鳥龍紋				○		たいひさむ	外箱	墨書付	「金森宗和と言傳ふ」の記載有。
			玳皮蓋 唐臣瓦長角紋	○					玳皮蓋 天目	内箱	金粉字形	
			同 本龍紋					○	—			
			文字天目					○	—			茶碗に「富貴長命」等の文字有。
			同					○	—			茶碗に「富貴長命」等の文字有。
			玳皮蓋 鳥龍花紋					○	—			
			鼈甲蓋					○	—			
		雑天目	烏蓋	○					烏蓋	箱		
			別山天目					○	—			
			白天目					○	—			
			同				○		白天目 武蔵野紹鷗所持	外箱	金粉字形	
			同					○	—			利休筆添掛物（行書体）画像有。
			黄天目					○	—			

		同	○				黄天目	小堀遠州	内箱	金粉字形	挿図の文字位置は異なるが、記載から内箱と思われる。
		同				○	一				
		菊花天目	○		○		菊花 天目 巳	記載なし	箱		「菊花 天目」隷書体、「巳」楷書体。
		朧天目	○		○		朧 天目 申	小堀遠州	内箱		「朧 天目」隷書体、「申」楷書体。
		古瀬戸天目			○		古瀬戸 御天目	記載なし	内箱	貼紙	
青磁之部		馬蝗絆				○	一				
		満月			○		満月	了々斎	抱家	黒漆書付	
		荷葉				○	一				
		珠光青磁				○	一				
		割高臺				○	一				松平不昧筆添書付（定家様）画像有。
		同				○	一				
		同				○	一				
		遊撃			○		遊撃	記載なし	内箱	書付張紙	
		割高臺	○		○		高麗 わりかうたい	小堀遠州	外箱	金粉字形	「高麗」隷書体、「わりかうたい」定家様。
		針屋割高臺			○		割高臺	記載なし	外箱	金粉字形	備考に「名物記付録に此書付公家衆の筆跡と見ゆ」の記載有。
		等庵			○		等庵 茶碗	古田織部	箱		「書付古田織部と云傳」の記載有。
		割高臺			○		利休百會二用ユ 奴翁（花押）	万仞和尚	外箱		
		中違			○		中違之茶碗 二ツ之内	記載なし	箱	金粉字形	
		人形手之部	○				春慶人形手 茶碗	記載なし	箱	金粉字形	
		同	○				青磁 人形 茶垵	小堀政之	箱		小堀大膳政之書付極札の記載有。
		同			○		少庵所持 人形茶碗 旦（花押）	千宗旦	内箱（裏）		「書付板横目に認む」の記載有。
					○		人形茶碗 少庵所持 宗旦 書付 宗左（花押）	原叟（覚々斎）	外箱（裏）		
		同			○		人形 寶尽 茶碗	記載なし	外箱		
		同			○		一				
雲鶴、狂言袴之部		藤袴			○		蘭 茶碗	織田有楽斎	内箱	貼紙	
		狂言袴	○				狂言袴 茶碗	記載なし	惣箱		「書付板横目に認む」の記載有。
		狂言袴手			○		狂言袴手	小堀宗中	箱		隷書体の筆法が僅かに見られる。
		抱木鞘	○				曳木鞘 狂言袴	記載なし	内箱	金粉字形	利休筆添掛物（行書体）画像有。
		高麗雲鶴	○				高麗	記載なし	箱	金粉	茶碗に「正銀参百兩」等の文字有。

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			足田筒					○	一			
			女郎花	○					女郎花 筒茶碗	小堀権十郎	内箱 (表)	外箱の可能性有。
					○				女郎花うしろめ たくも見 ゆる哉・・・※	小堀権十郎	内箱 (裏)	※和歌が記される。
			東雲	○	○				雲鶴筒 しのめ	小堀権十郎	内箱	「雲鶴筒」隸書体、「しのめ」定家様。
			雲鶴筒	○					雲鶴 筒	小堀政之(宗慶)	内箱	「裏書付色紙古筆了意」記載有。
			雲鶴筒					○	一			
	熊川之部		白菊	○					熊川 白菊	小堀権十郎	内箱	細川三斎筆添掛物(行書体)画像有。
			花摺	○					花摺	小堀備中守宗慶	箱 (表)	
					○				露わくる袖にそうつ るむ らさきの・・・※	小堀備中守宗慶	箱 (裏)	※和歌が記される。
			大和熊川			○			熊川 茶碗	二代範内真翁 (月心軒)	外箱	「豊公ヨリ拝領福壽巾在中」の張紙有。解袋に「福壽」文字有。
			桑山			○			熊川 桑山	記載なし	内箱	銀粉字形
			加賀紫					○	一			
			夏山					○	一			
	玉子手之部		玉鏡	○					玉鏡	松平周防守康福 妙閑	挽家	金粉字形
			高麗色替	○					高麗色替 茶碗	小堀宗中	外箱	
			薄柿	○					高麗 薄柿	小堀十左衛門	内箱	金粉字形
			秋風	○	○				秋風 玉子手	松平不昧	箱	「秋風」隸書体、「玉子手」定家様。
			玉椿	○					玉椿	小堀宗實	箱	銀粉字形
			小倉山		○				小倉山	記載なし	箱	金粉字形
			雪柳		○				雪柳	松平周防守	曲	
			古高麗					○	一			
	雨漏堅手之部		雨漏				○		高麗 茶碗 雨漏	佐々木丈山	外箱	画像不明瞭のため書体一部不明。
			長崎堅手					○	一			
			無一物				○		無一物	大燈国師	内箱	金粉字形
			饗蟲	○	○				高麗 茶碗 饗虫	松平不昧	内箱 (表)	「高麗 茶碗」隸書体、「饗虫」定家様。
							○		月清集上 ふるさとの板ま に・・・※	筆者未知	内箱 (裏)	※和歌が記される。
			大阪堅手	○					大坂	小堀遠州	箱	

		平野堅手		○				ひらの茶碗	松花堂昭乗	内箱	金粉字形	外箱の可能性有。
		優曇華	○					優曇華	記載なし	内箱※	金粉字形	「堅手」の可能性がある。
		堅手 かすかひ	○	○				堅手 かすかい 茶碗	記載なし	箱		「堅手」「茶碗」隸書体、「かすかい」定家様。
	御所丸之部	吉田高麗白	○					吉田高麗	小堀遠州	内箱		画像不明瞭のため書体一部不明。
		藤田 同	○					藤田 茶碗	小堀遠州	箱		
		御所丸 同	○	○	○			吉田 高麗 茶碗	記載なし	内箱	金粉字形	「吉」篆隸体、「麗」行草体、他楷書体。
		同			○			御所丸 茶碗	記載なし	外箱		
		同			○			高麗茶碗	片桐石州	内箱		
		夕陽 高麗毛				○		—				
		御所丸 高麗毛		○				御所丸	船越伊予守	箱		
		緋袴 同			○			御所丸 緋袴	記載なし	内箱	金粉字形	
		堅田 同				○		—				
		御所丸 同			○			知三 御所丸	記載なし	外箱	布地書付	
		同				○		—				
第七編	井戸之部	名物手		○	○			本多能登守・・・※ いとちやわん	記載なし	内箱	金粉	「いとちやわん」のみ行書体。※由来が記される。
		加賀井戸				○		—				
		筒井筒			○			筒井筒	金森宗和	内箱	金粉字形	
					○			筒井筒	記載なし	外箱	金粉字形	
		宗及井戸	○					井戸 宗及所持 茶碗	小堀遠州	箱	金粉字形	
		有樂井戸			○			有樂 井戸	英一蝶	内箱	金銀粉字形	「有樂」金粉、「井戸」銀粉。
		淺野井戸	○					井戸 茶碗	記載なし	箱		
		細川井戸			○			細川井戸	筆者不知	外箱	書付張紙	
		越後井戸	○					越後殿井戸	記載なし	内箱	書付張紙	
			○					越後井戸	記載なし	外箱	金粉字形	
		松永井戸	○	○				井戸 松永	筆者不知	内箱	金銀粉字形	「井戸」隸書体・金粉、「松永」定家様・銀粉。
		福島井戸				○		—				
		坂部井戸				○		—				
		美濃井戸		○				美濃 ちやわん 井と	酒井雅楽頭宗雅	中箱	金粉字形	
		翁	○					翁 井戸	筆者未詳	内箱	金粉字形	
		坂本井戸		○				常磐	記載なし	内箱	金粉	
					○			坂本井戸	記載なし	外箱	張紙	
		金地院井戸	○					高麗 金地院 茶碗	記載なし	箱	銀粉字形	

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			老僧				○		老僧 井戸	内箱		
			紀伊戸					○	一	藤堂高巖		
			堀井戸					○	一			
			立華井戸	○					立華	箱	金粉字形	
			龍光院井戸					○	一	記載なし		
			九重井戸				○		井戸 茶碗 九重	内箱	金粉書付	
			九重井戸			○			九重	内箱	金粉字形	
			本阿彌井戸	○					玉川 本阿弥 井戸	外箱	金粉字形	
			大高麗				○		大高麗 御茶碗	中箱	金粉字形	
			大井戸				○		大井戸	内箱	金粉字形	
			大井戸 ^{銘シコロ}				○		大井戸 御茶碗 銘シコロ	中箱	金粉字形・張紙	箱裏に「千利休真筆也」の記載。「銘シコロ」のみ張紙。
		古井戸	老僧井戸				○		老僧 御茶碗	内箱		
				○					哀公遺愛 齋昭記(花押)	外箱(裏)		
			六地藏	○					井戸茶碗	内箱		
			忘水	○					忘水 高麗	箱		
			小鹽井戸	○					井戸 小鹽	内箱(表)		
					○				ふた葉より神をそ たるむをしは山・・・※	内箱(裏)		※和歌が記される。
			上林井戸	○					上林	箱	金粉字形	
			小笠原井戸	○					井戸 茶碗			
			榮仁井戸					○	一	記載なし		
			江岑井戸				○		井戸	内箱(表)		
							○		江岑所持井戸 茶碗箱ヲモテ・・・※	内箱(裏)		※由来が記される。
			若菜井戸				○		若菜	内箱	金粉字形	
			宇治井戸			○			宇治 井戸			画像についての説明なし。画像より貼紙。
							○		宇治			画像についての説明なし。画像より貼紙。
			金澤井戸	○					金澤井戸	外箱	凹彫緑青入	
			水戸井戸			○			井戸 水戸	外箱		
			利休井戸					○	一	記載なし		
			利休小井戸					○	一			
			須彌				○		須弥	箱(表)	金粉字形	

						一棒 須弥 粉砕 夢伴子書	天祐紹果	箱 (裏)	金粉字形	
		柏木井戸		○		井戸 柏木	松平備前守	内箱	銀粉	隸書体の筆法が僅かに見られる。
				○		菊二 井戸 柏木	記載なし	外箱		画像不明瞭のため書体一部不明。
		小濱井戸		○		小濱	記載なし	箱	金粉字形	
		雄藏山		○		雄藏山	伝松花堂	内箱	金粉字形	
		小貫乳		○		一				
		小井戸	○			小井戸	記載なし	内箱	金粉字形	
		小鷹				一				
		寶樹庵	○			寶樹 茶碗	小堀政安	内箱	金粉	
		八文字屋井戸				一				
		蓬萊		○		蓬萊	片桐石州	箱	金粉	
		こたま		○		古多萬	有栖川熾仁親王	内箱 (表)		
				○		ふるきより今も ひ、かせて・・・※	有栖川熾仁親王	内箱 (裏)		※和歌が記される。
			○			こたま	小堀政之	外箱	金粉字形	
		竹屋井戸	○			何陋 竹屋	筆者不知	内箱 (表)		
			○			此茶壺竹屋宗都 愛玩故世 に竹屋・・・※	戸田露吟	内箱 (裏)		※由来が記される。
		升屋井戸		○		升屋井戸	記載なし	箱 (裏)	金混紙紙	
		柴田井戸	○			柴田井戸	記載なし	内箱 (表)	金粉字形	
				○		柴田修理所持青山 家臣朝 比奈氏傳承	記載なし	内箱 (裏)	朱漆書付	
		隼		○		隼	伏見宮貞愛親王	内箱		
				○		高麗 茶碗	戴内竹翠	中箱		
		初霞	○			はつ霞	小堀遠州	内箱	金粉字形	
		雲井		○		雲井	白山宗一	内箱 (表)		
				○		播磨かたすまの はれまに なかもれは・・・※	白山宗一	内箱 (裏)		※和歌が記される。
		蓬壺		○		蓬壺	筆者不知	内箱	銀粉字形	
		春日野	○	○		高麗茶碗 春日野	筆者不知	箱		「高麗茶碗」楷書体、「春日野」行書体。
		松本井戸		○		井戸 茶碗 松本	記載なし	外箱 (表)		
			○			此茶碗松本氏所持 後佐久 間不干斎江・・・※	記載なし	外箱 (裏)		※由来が記される。
		澤瀉	○			澤瀉	記載なし	箱	金粉字形	
		四もと		○		四もと	飛鳥井雅重	内箱		

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体					
			義村井戸	○			○	井戸 義村 茶盤	記載なし	外箱	金銀粉字形	「義村」のみ行書体。
			久田井戸					—				
			藤屋井戸			○		井戸	記載なし	内箱		
							○	此箱蓋表張紙書付 曾祖父了誓真筆也・・・※	藤屋(左右衛門)	外箱 (裏)		※由来が記される。
			鳴戸	○				鳴戸	小堀権十郎	内箱	金粉字形	
			秋野					—				
			田中井戸				○	—				
			涼及井戸	○				涼及井戸	不住和尚	内箱	金粉字形	
			古今				○	—				
			金鳳				○	井戸	裁内竹翠	箱	金粉字	
							○	金鳳	裁内竹翠	替箱		
								陶寶時堀一井半容 燗似雙思緒成今・・・※	長崎昌齋	箱 (裏)		※由来が記される。
	井戸脇		長崎				○	井戸脇 茶堦	記載なし	内箱		
			井戸脇	○				井戸脇	裁内竹斎	箱		画像不明瞭のため、行書体の可能性有。
			同			○		井戸				記載はないが、画像・挿図より書付は張紙。
			鳥羽屋			○		井戸脇	筆者不知	内箱 (胴)		「別蔵」の張紙(行書体)有。
	呉器之部		一文字			○		一文字茶碗	記載なし	外箱		
			紅葉呉器					—				
			菊月	○				五器 菊月	小堀遠州	内箱		
			紅葉呉器	○				高麗 紅葉五器 茶碗	記載なし	箱		
			久次米雛呉器			○		五器	記載なし	内箱		
			雛五器				○	五器張水 三割高臺	記載なし	箱		
			雛呉器					—				
			雛呉器	○				雛呉器	記載なし	外箱	銀粉	
			磐瀬山	○				磐瀬山	小堀遠州	箱		
			色替	○				五器手 色替	筆者未詳	内・外箱		内箱か外箱のいずれかは不明。
			大徳寺五器				○	大徳寺五器 茶盤	筆者未詳	内箱	朱書付	
	魚屋之部		利休斗々屋		○			と、や	小堀遠州	内箱		
			東高麗		○	○		東 高麗	小堀遠州	箱		「東」定家様、「高麗」楷書体。
			江戸魚屋		○			江戸 と、や	小堀遠州	内箱		
			市原				○	—				

			○	○			高麗 と、や 茶碗	松平不昧	箱		「高麗 と、や」定家様、「茶碗」隷書体。
		春霞		○			春霞 霞ゆく たか根をいつる 朝日影・・・※	松平不昧	曲 (表)	金粉字形	※和歌が記される。
				○			春霞 と、や 茶碗	松平不昧	外箱	銀粉字形	「春霞 と、や」定家様、「茶碗」隷書体。
		峰雪	○				峯雪	筆者未詳	箱	金粉字形	
		唐織			○		と、や	松平不昧	内箱 (表)	金粉字形	
					○		唐織 (花押)	矢倉竹甫	内箱 (裏)	雲形色紙	
		螢					戸々屋 螢	小堀権十郎	箱		画像不明瞭のため書体不明。
		龍田			○		龍田	松花堂昭乗	曲	銀粉字形	
		小鷹				○	—				
		葉鶏頭		○			葉鶏頭	荒木宗因	内箱 (表)	黒漆	
					○		完全 さいく かうのいけ 道徳	鴻池道徳	内箱 (裏)	黒漆	
		龍田					龍田	津田宗及	曲	黒漆	画像不明瞭のため書体不明。
柿の帯之部		柿の帯			○		—				
		春尾			○		柿の帯 茶碗	薩摩屋素朴	内箱 (表)		
					○		柿のへた 茶碗掛目九十四匁 二分 長福 (花押)	薩摩屋素朴	内箱 (裏)		「書付板横目に認む」の記載有。
		大津	○				柿之蒂 大津	長田新月	惣箱		
		柿の帯		○			柿のへた	松平不昧	内箱	金粉字形	
		瀧川		○			柿のへた たき川	小堀権十郎	内箱 (表)		
				○			せをはやみ 岩にせかる、 瀧川の・・・※	小堀権十郎	内箱 (裏)	金粉字形	※和歌が記される。
		京極		○			京極	佐久間将監真勝	箱		
		蕎麥之部			○		蕎麥 残月	筆者不知	箱		
		春山		○			春山 茶碗	松平不昧	箱 (表)	金粉字形	
				○			浅みとりかすめえる 空の けしきにや・・・※	松平不昧	箱 (裏)	銀粉	※和歌が記される。
		玉川	○				玉川 茶碗	松平不昧	箱 (表)	銀粉字形	
				○			こまどめてなほ水かはむ山 吹の・・・※	松平不昧	箱 (裏)		※和歌が記される。
		御本之部				○	—				
		立鶴					立鶴 茶碗 宇杵野	長田新月	内箱 (表)	金粉字形	
		宇棚野	○				あふみより あさたちくれ は うねの、に・・・※	長田新月	内箱 (裏)	墨書	※和歌が記される。

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項	
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体						記載無
第八編	伊羅保之部	千種		○			○		古御本 立鶴 字枡野	長田新月	外箱	銀粉字形	
									いらほ	平瀬露香	内箱		
									伊羅保	記載なし	外箱 (表)		蓋裏に「宮表祖孝半仙翁筆」の記載有。
					○				宮表祖半仙翁筆 (花押)	記載なし	外箱 (裏)		
								○	—				
					同				伊羅保 池水	近衛家熙	箱	書付張紙	箱裏に古筆了仲の色紙書付有。
					池水			○	伊羅保 茶碗 夏山	酒井榮頭宗雅	内箱		
					夏山	○			いら保 わか草	記載なし	内箱		定家様の筆法が僅かに見られる。
					若草		○		イラホ 片身替 茶碗	記載なし	外箱	金粉字形	
									—				
					片身替				○				
					薬替		○		薬替 小イラホ 茶碗	茶屋宗古	箱		
					伊羅保		○		伊羅保 茶碗	記載なし	箱		
					對馬伊羅保			○	—				
					沖伊羅保	○			伊羅保	記載なし	外箱		
					秋の山			○	—				
	釘彫		○			釘彫伊羅保茶碗	記載なし	外箱 (胴)	張紙	記載はないが画像より、外箱 (胴) 張紙。			
	柞	○	○			柞 いらほ	小堀遠州	箱		「柞」隸書体、「いらほ」定家様。古筆了意の極札有。			
	黄伊羅保				○	—							
	同				○	黄伊羅保 茶碗	記載なし	箱		定家様の筆法が僅かに見られる。			
	同					いらん不之茶碗 今日庵	山田宗偏	箱 (裏)		画像不明瞭のため書体不明。			
	同				○	宗偏 (花押)	山田宗偏	箱 (裏)					
	同				○	黄伊羅保 茶碗	記載なし	箱					
	粉引之部	粉引				○	—						
		三好粉吹		○		三好茶碗	金森宗和	内箱					
		粉吹				—							
		粉引			○	古飛起	慈胤親王	内箱	金粉字形	箱裏に古筆了仲の色紙書付有。			
		残雪		○		残雪	小堀遠州	内箱	金粉字形	定家様の筆法が僅かに見られる。			
	三島之部	三島桶		○		三島桶 御茶碗	記載なし	中箱	金粉字形				
		古三島				—							
		同		○		三島 亭 薄茶々碗	前田利常	内箱		定家様の筆法が僅かに見られる。			
		兩國		○		三志ま		内箱	金粉字形	「筆者小堀權十郎か」の記載有。			

		大三島				大三島茶碗	記載なし	内・外箱	書付張紙	内箱か外箱のいずれかは不明。
		三島刷毛目				一	記載なし	箱 (表)		
		八重垣	○			彫三島 茶碗	矢倉竹翁	箱 (表)	色紙書付	
		外花				彫三島 茶碗	記載なし	外箱		
		荒籬	○			彫三島 茶碗 阿羅籬	長田新月	外箱	銀粉字形	「彫三島 茶碗」隷書体、「阿羅籬」行書体。
		檜垣			○	檜かき	烏丸光廣	箱	金粉字	
		残雪	○			彫三島茶盃 銘 檜垣	記載なし	外箱	金粉字	
		彫三島			○	残雪	筆者未詳	箱	金粉字形	
		二徳三島			○	一				
		上田番手	○			古三島 上田	記載なし	内箱	金粉字形	
		土井三島	○			古三島 茶碗 土井	記載なし	外箱		
		三作			○	一				
		同			○	一				
		合甫	○			刷目 茶碗 合甫	平瀬露香	外箱		「覆紙 筆者平瀬露香」記載有。
		残雪	○			残雪	小堀蓬州	箱	金銀粉字形	「残」金粉、「雪」銀粉。
		海内		○		はけめ 海内 茶碗	小堀蓬露	内箱 (表)		
		白波			○	四海之内兄弟也	小堀蓬露	内箱 (裏)	銀粉銘	
		刷毛目			○	白波	柳澤堯山(保光)	曲		
		雪月			○	一				
		刷目	○			雪月	記載なし	内箱		
		無地刷毛目				刷目 茶碗	小堀蓬州	内箱		
		刷毛目筆洗			○	無地刷毛目 中服	筆者未詳	箱	張紙	
		編笠			○	一				
		編笠			○	一				
		編笠			○	高麗 はけめ 茶碗 あみ笠	筆者未詳	箱	金粉字形	
		北辰		○		北辰	記載なし	内箱	銀粉字形	隷書体の筆法が僅かに見られる。
		楚白			○	一				
		有來	○			有來	小堀十左衛門	内箱 (表)		
						そばく茶碗の手	土屋相模守	内箱 (裏)	張紙書付	
		金海之部	○			金海 西王母	桑山宗仙	内箱	金粉字形	
					○	西王母	矢倉竹翁	外箱		
		東方朔	○			金海 茶碗	筆者未詳	箱	銀粉字形	

編	部	分類	通称	書体					書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無					
			藤波	○			○		金海 茶碗 東方明 金海手茶碗 洵濱形	下村實栗	外箱		
							○		藤浪 左(花押) 宗旦所持	江岑宗佐	内箱(裏)		「表書付板横目に認む」の記載有。
			金海			○			金賀伊 茶盃	記載なし	内箱	金粉字形	
	高麗之部		荒木高麗				○		荒木撰津守所持 荒木茶碗・・・※	記載なし	箱	金粉字形	※由来が記される。
			古手屋	○		○			古手屋 高麗茶碗	記載なし	箱	金粉字形	「古手屋」楷書体、「高麗茶碗」隸書体。
			白鷗		○				白鷗	松花堂	内箱(表)		
					○				江南野水碧於 天中有白鷗 閑 似我	松花堂	内箱(裏)		
			頭巾				○		高麗 頭巾 紹鷗	万仞和尚	外箱		
			邪高麗	○					邪高麗大	小堀遠州	箱		
			飯櫃高麗				○		榮忍茶碗	記載なし	内箱		
			高麗鹽竈						高麗 監桶 利休所持 寛永廿一年 拝領	記載なし	内箱		画像不明のため書体不明。
			餌袋	○					餌袋茶碗	松花堂	内箱		
			鉢子成	○					吹墨 茶碗 鉢子成	小堀遠州	箱		
			繪高麗		○		○		繪高麗 茶院	記載なし	箱		「繪高麗」行書体、「茶碗」定家様。
			繪高麗	○					繪高麗 茶院	記載なし	箱		
	奥高麗之部		深山路	○					深山路	筆者未詳	内箱		
			離駒	○					離駒	半日庵	内箱		
				○					繫馬 四酔清玩	四酔清玩	大外箱		「四酔清玩」は朱印。書付者は朱印による。
	瀬戸之部		瀬戸茶碗	○					瀬戸 茶碗	松花堂	内箱		
			花山	○	○				瀬戸 花山	伝小堀遠州	箱		「山」のみ隸書体。
			古瀬戸				○		古せとちやわん	細川三齋夫人(秀樹院)	内箱		
			朝比奈				○		アサイナ 茶碗 宗旦	江岑宗左	内箱(表)		
							○		宗旦 号朝比奈 左(花押)	江岑宗左	内箱(裏)		定家様の筆法が僅かに見られる。
			繪瀬戸		○				そめ付茶碗	松花堂	箱		
			瀬戸藍紙						瀬戸 筒茶碗	記載なし	箱		画像不明のため、書体不明。
			小原木		○				小原木	千利休	内箱	金粉字形	
							○		此茶碗江戸より来る於瀬戸黒者奇妙・・・※	記載なし	外箱(裏)		※由来が記される。書付者の花押有。

		日松			○			瀬戸黒 茶碗 日松 此瀬戸黒日松所 持世に名 高き名・・・※	戸田露吟	内箱 (表)		定家様の筆法が僅かに見られる。
					○			戸田露吟	内箱 (裏)			※由来が記される。
		島筋黒			○			黒瀬戸 茶碗 黒瀬戸 茶碗 島筋一名天 正黒・・・※	記載なし	箱		画像不明瞭のため、一部書体不明。
					○			記載なし	内箱			※由来が記される。
伯庵之部	伯庵本歌							瀬戸伯庵 茶碗	小堀遠州	箱	書付張紙	画像不明瞭のため、書体不明。
	冬木伯庵	○						瀬戸伯庵 茶碗	小堀遠州	内箱		「瀬」は上部「水」・下部「頼」の 異体字。
	奥田伯庵				○	—						
	土岐伯庵				○	—						
	宗節伯庵				○	—						
	酒井伯庵			○			伯庵	記載なし	内箱			
	朽木伯庵				○		伯庵	記載なし	内箱		張紙	
	天王寺屋伯庵			○			なまこ 茶碗	筆者不詳	内箱			
元寶之部	元寶焼	○					元寶焼 茶碗 元寶焼 明の陳元寶字義都 号は…※	記載なし	内箱 (表)	内箱 (裏)	凹字緑青入	
				○				歌仙庵	内箱 (裏)		書付色紙	※由来が記される。書付者名有。
織部之部	赤織部		○				赤織部	記載なし	外箱			
	織部沓			○			溝口伯州様 古田織部	古田織部	箱			画像不明瞭のため、一部書体不明。
志野之部	卯花塙			○			卯花塙	片桐石州	内箱 (表)			
				○			やまさとのうのはなか のなかつみち・・・※	片桐石州	内箱 (裏)		色紙貼	※和歌が記される。
	朝萩		○				朝萩	松平不昧	箱		朱漆書付	
	無地志野				○	—						
	朝陽			○			志野 朝陽	筆者未詳	内箱		金粉字形	定家様の筆法が僅かに見られる。
	山端			○			山端 志野	筆者未詳	箱 (表)		墨書付・張紙	「山端」墨書付・「志野」張紙。
				○			五月雨ははれんとやする 山端に・・・※	筆者未詳	箱 (裏)			※和歌が記される。
	志野織部筒			○		—						花押のみの箱書画像有。
唐津之部	菖蒲刀			○			菖蒲刀	記載なし	箱			定家様の筆法が僅かに見られる。
	江戸	○		○			江戸 からつ	記載なし	外箱			「江戸」隸書体「からつ」行書体。
	唐津石はぜ				○	—						
	唐津石はぜ				○	—						
	繪唐津			○			聚楽ノ御茶箱	敷内竹心	内箱 (裏)			
			○				エカラツ	敷内剣仲	中箱		書付張紙	画像不明瞭のため、一部書体不明。

編	部	分類	通称	書体					書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無					
	薩摩之部		殘月		○				殘月 なくさみは きのふもけふも・・・※	小堀権十郎	内箱		極札有。※和歌が記される。
			薩摩晩評を留山亭					○	—				
	丹波之部		鬼ヶ城						おにか城 古丹はちや碗	如心斎	内箱 (表)	朱漆	画像不明瞭のため、書体不明であるが行書体か。
							○		古丹波焼 鬼ヶ城 左 (花押) 仙鶴大	如心斎	内箱 (裏)	墨書	
	高取之部		高取面茶碗	○					高取面 茶碗	小堀遠州	内箱		
	萩之部		是界坊				○		織部ヨリ来 わりかうたい茶碗 是界坊	戴内紹智竹心	箱		
			田子浦				○		田子浦	記載なし	内箱 (表)		
							○		なみの底みや しろたへの気色は・・・※	記載なし	内箱 (裏)	金粉字形	※和歌が記される。花押有。
			元祖萩			○			朝鮮人來居於長門萩以高麗之士・・・※	記載なし	内箱 (裏)		※由来が記される。妙喜庵の焼印有。
	朝日之部		胴紐	○					朝日 茶碗 胴紐	記載なし	外箱	金粉字形	
			老浪	○					朝日 茶碗 老浪	記載なし	内箱		
	信樂之部		水の子				○		水のご 信樂茶碗 左 (花押) 大徳寺大仲傳	覚々斎	内箱 (裏)		
			花橘		○				花たち はな	小堀遠州	内箱 (裏)	金粉字形	
					○				むかしをば花たち はなのなかり せは・・・※	小堀遠州	内箱 (裏)	金粉字形	※和歌が記される。
	新兵衛之部		不言				○		しから筆	記載なし	箱 (表)		
							○		新兵衛作 不言と呼 (花押)	記載なし	箱 (裏)		
	伊賀之部		數内					○	—				
	大樋之部		臘月庵					○	—				
	九谷之部		古九谷金欄	○					古九谷金欄 茶碗	記載なし	箱		
第九編	長次郎之部		東陽坊				○		東陽坊 利休所	利休	内箱 (表)		
							○		東陽坊黒茶碗 利休所持・・・※	仙叟・利休	内箱 (裏)		※由来が記される。千宗室・千宗易の花押有。
			早船				○		はやふね	利休	内箱	張紙	利休筆添掛物 (行書体) 画像有。
							○		早松	矢倉竹翁	外箱	張紙	
			木守		○				利休所持 木守茶碗	千一翁宗守 (堅叟宗守)	内箱	金粉字形	
							○		木守 茶碗	千文叔	外箱	金粉字形	
			大黒				○		大クロ 利休所持 少庵傳 宗旦・・・※	江岑	内箱 (裏)	朱漆	※由来が記される。

[illegible]

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
							○		長二郎赤茶碗 号名つつみ柿・・・※	原叟(覚々斎)	内箱(裏)	※由来が記される。
							○		長二郎赤茶碗 覚々斎極・・・※	如心斎	中箱(裏)	※由来が記される。
							○		長二郎焼赤茶碗 覚々斎銘・・・※	又玄斎一燈	外箱(裏)	※由来が記される。
			勾當				○		利休在判 楽茶碗・・・※	仙叟宗室	箱(裏)	※由来が記される。
							○		句當 長次郎焼	玄々斎	外箱	朱漆書
			天狗				○		天狗(花押) 楽左	覚々斎	内箱	
				○					天狗 赤茶碗	松平不昧	外箱	
			小狐				○		小きつね	利休	曲	張紙
							○		子狐 赤	宗旦	内箱(表)	朱漆
							○		宗易銘 赤茶碗 子狐 宗旦(花押)	宗旦	内箱(裏)	朱漆
			三輪		○		○		楽焼赤茶碗 長次郎作	如心斎	箱(表)	「楽焼赤茶碗」行書体、「長次郎作」楷書体。
							○		長次郎 焼赤茶 碗名三輪ト云傳 宗左(花押)	如心斎	箱(裏)	
			獅子				○		長次郎赤茶 碗 銘 獅子左(花押)	覚々斎	内箱	不味筆包物(隸書体・定家様)画像有。
			夕暮				○		長次郎焼赤	咄斎宗旦	内箱(表)	金短冊張紙
									咄斎(花押) 夕暮	咄斎宗旦	内箱(裏)	
				○					夕暮赤茶碗	本多伊予守宗龍(忠純)	中箱(表)	
							○		長次郎 赤茶碗 宗旦書付夕暮(花押)	覚々斎宗佐	中箱(裏)	
			苔志水				○		赤茶碗 長次郎焼 苔清水宗室(花押)	仙叟宗室	内箱(裏)	
							○		長次郎赤茶碗 銘苔志水仙叟極・・・※	如心斎	外箱(裏)	※由来が記される。
			玄翁				○		長次郎 赤茶碗 銘 玄翁と云 宗左(花押)	覚々斎	内箱(裏)	
			貧僧				○		朝鵬 黒茶碗	仙叟	箱	墨書付
			俊寛				○		長二郎 黒茶碗 俊寛	宗旦・利休	内箱(表)	張紙
							○		利休めは道具二つ・・・※	仙叟	内箱(裏)	※由来が記される。
							○		長二郎黒茶碗 利 俊寛と銘・・・※	如心斎	外箱(裏)	※由来が記される。

[illegible]

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無				
			稲妻				○		ノソカウ 黒茶碗 啐啄斎 (花押)	啐啄斎	内箱 (表)	
							○		稲妻 左 (花押)	江岑宗左	内箱 (裏)	
							○		ノソカウ 稲妻 不審庵	了々斎	外箱 (表)	
							○		傳米 稲妻茶碗 箱表書 付・・・※	碌々斎	外箱 (裏)	※書付について記される。
			鳳林				○		鹿苑寺鳳林和尚御所持 旦逐一覧候 左 (花押)	江岑宗左	内箱 (裏)	
							○		のんかう 赤 茶碗 達源齋 書付 鳳林 左	如心斎	外箱 (裏)	
			若山				○		ノソコウ赤茶碗 若山	如心斎	内箱	
			桔梗					○	—			
			善福寺				○		つ、黒茶碗	記載なし	内箱	
			青山					○	—			
			霞				○		ノソカウ 黒茶碗 不審主 (花押)	啐啄斎	内箱	
							○		ノソカウ作 黒茶碗 啐啄 箱書付・・・※	碌々斎	外箱 (裏)	※書付について記される。
			此花			○	○		此花 茶碗 此花興碧共相 芳・・・※	記載なし	内箱	「此花」のみ行書体。※漢詩が記 される。
			香久山				○		香久山 茶碗	江岑	内箱	画像不明瞭のため、一部書体不明。
			今枝				○		樂山 茶碗	記載なし	内箱	
			一介				○		土齋赤茶碗	覚々斎千原叟	内箱 (表)	朱漆 張紙
							○		名一介 (花押) のんかう 茶碗・・・※	覚々斎千原叟	内箱 (裏)	※由来が記される。
			虹				○		ノソカウ 赤 茶碗 虹 左 (花押)	覚々斎	内箱 (裏)	
							○		ノソカウ アカ茶碗 覚々 書付 虹 左 (花押)	如心斎	外箱 (裏)	
			熟柿				○		熟柿	宗旦	内箱	
							○		道得三十棒 言不得三十棒 ト云々・・・※	坂本周斎	中箱 (裏)	※由来が記される。
			僧正				○		僧正 普 (花押)	杉木普斎	内箱 (表)	
							○		宗旦 老 所持	杉木普斎	内箱 (裏)	
							○		赤茶碗 のんこ作 僧心 善齋書付	記載なし	外箱	金粉字形
			白雲				○		白雲	如心斎	内箱 (表)	

						○	ノシカウ 赤茶碗 よそにのみ見てや、... ※	如心斎	内箱 (裏)		※和歌が記される。
	酒吞童子					○	ノシカウ 赤茶碗 覺々うかうかと... ※	覺々斎	内箱 (裏)		※和歌が記される。
						○	ノシカウ 作赤茶碗 覺々斎 直書附... ※	玄々斎	外箱 (裏)		※由来が記される。
	山窓					○	のんかう 黒茶碗 山窓ト号 左 (花押)	啐啄斎	内箱 (裏)		
	腰蓑					○	乗茶碗	宗旦	箱 (表)	張紙	
						○	宗旦時代 吉兵衛焼 腰蓑 宗室 (花押)	宗旦	箱 (裏)		
	三光	○				○	三光 裏書 四方庵宗備 筆... ※	山田宗備	内箱 (表)	銀粉字形・張紙	「三光」のみ隷書体・銀粉字形。 ※由来が貼られる。
						○	四方九路 十二屋 源兵衛 ヨリ来... ※	山田宗備	内箱 (裏)		※由来が記される。
						○	ノシカウ 作四方 黒茶碗 呼銘三光... ※	千歳々斎	外箱		※由来が記される。
	壽老人					○	ノシカウ 黒茶 碗 銘 壽老人 (花押)	覺々斎原叟	箱 (裏)		
	梅花					○	ノシカウ 黒 茶碗 内ノ書付... ※	不寂	箱 (表)		※書付について記される。
						○	ノシカウ 茶碗 梅花ト云 左 (花押)	如心斎	箱 (裏)		
宗全之部	鬼薊					○	宗全 手やき	覺々斎	内箱 (表)		
						○	宗全 作アカ 茶碗 左 (花押) 銘 鬼アサミ	覺々斎	内箱 (裏)		
	初腰		○				宗全 作茶碗 はつさくら 左 (花押)	覺々斎千宗左	内箱 (裏)		
	かき餅					○	宗全 作茶碗 号名 ト云 宗左 (花押)	覺々斎	箱 (裏)		
原叟之部	鈍太郎					○	銘鈍太郎 宗左 作 笠櫃記 寫 宗左 (花押)	笠櫃和尚・原叟 宗左	内箱 (裏)		覺々斎筆添掛物 (行書体) 2点画 像有。
						○	鈍太郎 黒茶碗 覺々斎 ヲリ 給依之号 太郎庵 源郎	高田源郎	中箱 (表)		
						○	此黒茶碗 銘大徳寺 笠櫃和尚 筆也... ※	久田宗庵	中箱 (裏)		※書付・由来が記される。
						○	宗旦 判 一閑張 簀也 左 (花押) 太郎庵へ	原叟	添襖箱 (裏)		
	太郎坊					○	太郎	覺々斎原叟	内箱 (表)		
						○	黒茶碗 太郎 樂左 (花押)	覺々斎原叟	内箱 (裏)		
	次郎					○	次郎	原叟	内箱 (表)		

編	部	分類	通称	書体				書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体					
							○	黒茶碗 次郎 覚々(花押)	原叟	内箱 (裏)		
			三郎				○	三郎 左 十一へ遣ス	原叟	内箱 (表)		
							○	覚々 としのくれ まめて あいする 三郎哉	原叟	内箱 (裏)		
			闖罪人				○	黒茶碗 覺々斎造 闖罪人 ト云 左 (花押)	如心斎	内箱 (表)		
							○	く路茶碗 愚作下地 左 (花押) くし 罪人	如心斎	内箱 (表)		
	光悦之部		不二山				○	不二山 大虚庵 (印)	本阿弥光悦	内箱		
			加賀光悦				○	赤茶碗 加賀光悦 於加州 仙叟所持・・・※	宗乾	内箱 (裏)		※由来が記される。
			毘沙門堂				○	ビシヤモントラ 赤光悦茶 碗・・・※	玄々斎托叟	内箱 (表)		※書付が記される。
							○	此茶わん山科ノ 宮様へ光 悦被上候也・・・※	河井久嘉	内箱 (裏)		※由来が記される。
							○	光悦	記載なし	外箱	張紙	
			雪片				○	雪片	光悦	内箱	金粉字形	
					○			光悦筒茶碗 書付同筆	記載なし	外箱	漆書付	
			雪峰				○	雪峰 大虚庵	光悦	箱	金粉字形	画像不掲載のため、一部書体不明。
			障子				○	障子	仙叟	内箱		書付者「或云家原灌雪」の記載有。
			鍍壁				○	光悦黒茶碗	叔宗守	内箱 (表)		
							○	光悦黒茶碗宗旦光悦・・・ ※	叔宗守	内箱 (裏)		※由来が記される。
							○	黒 光悦	直斎(堅叟宗守)	外箱 (表)		
							○	鐵壁 光悦焼 黒 (花押) 文叔宗守伝来書有	直斎(堅叟宗守)	外箱 (裏)		
			紙屋	○				光悦焼	記載なし	内箱 (表)	金粉字形	
							○	本阿弥光悦手造 茶碗・・・ ※	紙屋列泉	内箱 (裏)	張紙	※由来が記される。
			七里				○	光悦	記載なし	内箱	金粉字形	
							○	七里光悦	記載なし	外箱		
			雨雲				○	光悦黒茶碗 銘 雨雲 左 (花押)	原叟	箱 (裏)		
			ヘゲメ				○	赤茶碗	光甫 (本阿弥光 甫)	内箱 (表)		「右包紙の裏に「表書付空中齋光 甫筆」とあり」の記載有。
							○	筒赤茶碗 光悦ヨリ光璫光 甫光傳・・・※	光甫 (本阿弥光 甫)	内箱 (裏)		※由来が記される。

編	部	分類	通称	書体						書付文字	書付者	書付箇所	書付方法	特記事項
				篆隸体	定家様	楷書体	行書体	記載無						
	仁清之部		扇流							おもろやき	金森宗和	箱		画像不明瞭のため書体不明。
			片男波				○			此茶碗もと本多播磨守の所持なり・・・※	篠原一貞	箱（裏）	色紙	※由来が記される。
			金銀筋					○	—					
			結髪斗				○			仁清茶碗 結髪斗繪アリ	記載なし	外箱		
			富士				○			仁清 富士山茶碗	金森宗和	箱		
			梅月				○			はん月 仁清 茶碗	筆者不知	箱		「書付板横目に認む」の記載有。
			しのぶぐさ	○	○					仁清 しのぶぐさ	長田新月	箱		「仁清」隸書体、「しのぶぐさ」定家様。
			鎮仙花					○	—					
			水仙				○			仁清焼 茶碗 水仙	筆者不明	箱		金森宗和筆添掛物（行書体）画像有。